

有価証券報告書

(金融商品取引法第24条第1項に基づく報告書)

事業年度 自 平成28年4月1日
(第147期) 至 平成29年3月31日



大阪府中央区北浜四丁目5番33号 (住友ビル)

(E01333)

目次

頁

表紙	
第一部 企業情報	1
第1 企業の概況	1
1. 主要な経営指標等の推移	1
2. 沿革	3
3. 事業の内容	4
4. 関係会社の状況	6
5. 従業員の状況	8
第2 事業の状況	9
1. 業績等の概要	9
2. 生産、受注及び販売の状況	10
3. 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等	10
4. 事業等のリスク	12
5. 経営上の重要な契約等	14
6. 研究開発活動	14
7. 財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析	17
第3 設備の状況	19
1. 設備投資等の概要	19
2. 主要な設備の状況	19
3. 設備の新設、除却等の計画	20
第4 提出会社の状況	21
1. 株式等の状況	21
(1) 株式の総数等	21
(2) 新株予約権等の状況	21
(3) 行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等	21
(4) ライツプランの内容	21
(5) 発行済株式総数、資本金等の推移	21
(6) 所有者別状況	21
(7) 大株主の状況	22
(8) 議決権の状況	22
(9) ストックオプション制度の内容	23
2. 自己株式の取得等の状況	23
3. 配当政策	24
4. 株価の推移	24
5. 役員の状況	25
6. コーポレート・ガバナンスの状況等	30
第5 経理の状況	39
1. 連結財務諸表等	40
(1) 連結財務諸表	40
(2) その他	78
2. 財務諸表等	79
(1) 財務諸表	79
(2) 主な資産及び負債の内容	88
(3) その他	88
第6 提出会社の株式事務の概要	89
第7 提出会社の参考情報	90
1. 提出会社の親会社等の情報	90
2. その他の参考情報	90
第二部 提出会社の保証会社等の情報	91

[監査報告書]

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成29年6月28日
【事業年度】	第147期（自平成28年4月1日至平成29年3月31日）
【会社名】	住友電気工業株式会社
【英訳名】	Sumitomo Electric Industries, Ltd.
【代表者の役職氏名】	社長 井上 治
【本店の所在の場所】	大阪市中央区北浜四丁目5番33号（住友ビル）
【電話番号】	大阪 06(6220)大代表4141
【事務連絡者氏名】	執行役員経理部長 小林 伸行
【最寄りの連絡場所】	東京都港区元赤坂一丁目3番13号
【電話番号】	東京 03(6406)大代表2600
【事務連絡者氏名】	財務部次長 新田 和久
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号） 株式会社名古屋証券取引所 （名古屋市中区栄三丁目8番20号） 証券会員制法人福岡証券取引所 （福岡市中央区天神二丁目14番2号）

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次		第143期	第144期	第145期	第146期	第147期
決算年月		平成25年3月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月
売上高	百万円	2,159,942	2,568,779	2,822,811	2,933,089	2,814,483
経常利益	百万円	94,116	145,354	160,597	165,658	173,872
親会社株主に帰属する 当期純利益	百万円	37,955	66,748	119,771	91,001	107,562
包括利益	百万円	121,985	156,909	286,376	△40,951	120,339
純資産額	百万円	1,244,695	1,379,912	1,646,913	1,561,289	1,626,502
総資産額	百万円	2,297,567	2,554,819	2,925,785	2,742,848	2,903,584
1株当たり純資産額	円	1,352.09	1,499.76	1,804.34	1,715.28	1,814.90
1株当たり当期純利益金額	円	47.85	84.15	151.00	114.73	137.61
潜在株式調整後1株当たり 当期純利益金額	円	—	—	—	—	137.24
自己資本比率	%	46.7	46.6	48.9	49.6	48.7
自己資本利益率	%	3.7	5.9	9.1	6.5	7.7
株価収益率	倍	24.3	18.3	10.4	11.9	13.4
営業活動による キャッシュ・フロー	百万円	124,849	147,705	153,509	240,779	209,233
投資活動による キャッシュ・フロー	百万円	△172,066	△174,102	△86,888	△117,387	△194,829
財務活動による キャッシュ・フロー	百万円	64,922	113	△64,037	△115,912	△4,763
現金及び現金同等物の期末残高	百万円	176,543	160,129	177,107	174,055	180,002
従業員数 (外、平均臨時雇用人員)	人 (人)	206,323 (30,317)	225,484 (34,457)	240,798 (34,553)	240,865 (39,124)	248,330 (38,168)

(注) 1. 売上高には、消費税等は含んでおりません。

2. 第143期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、希薄化効果を有している潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3. 第144期、第145期及び第146期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

(2) 提出会社の経営指標等

回次		第143期	第144期	第145期	第146期	第147期
決算年月		平成25年3月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月
売上高	百万円	779,753	832,484	910,657	928,976	901,892
経常利益	百万円	14,164	25,422	34,288	44,392	49,367
当期純利益	百万円	10,405	24,175	105,911	22,390	42,737
資本金	百万円	99,737	99,737	99,737	99,737	99,737
発行済株式総数	千株	793,941	793,941	793,941	793,941	793,941
純資産額	百万円	614,207	629,865	722,905	707,504	707,105
総資産額	百万円	1,064,793	1,120,231	1,180,671	1,220,413	1,237,498
1株当たり純資産額	円	774.20	793.94	911.22	891.81	906.44
1株当たり配当額 (内、1株当たり中間配当額)	円 (円)	20.00 (10.00)	22.00 (10.00)	30.00 (12.00)	35.00 (17.00)	40.00 (17.00)
1株当たり当期純利益金額	円	13.11	30.47	133.50	28.22	54.66
潜在株式調整後1株当たり 当期純利益金額	円	—	—	—	—	—
自己資本比率	%	57.7	56.2	61.2	58.0	57.1
自己資本利益率	%	1.7	3.9	15.7	3.1	6.0
株価収益率	倍	88.6	50.4	11.8	48.5	33.8
配当性向	%	152.6	72.2	22.5	124.0	73.2
従業員数 (外、平均臨時雇用人員)	人 (人)	4,050 (501)	4,232 (574)	4,722 (733)	4,984 (766)	5,034 (959)

(注) 1. 売上高には、消費税等は含んでおりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載していません。

3. 第147期の1株当たり配当額40円には、創業120周年記念配当2円を含んでおります。

2【沿革】

年月	経歴
明治30年4月	住友本店が日本製銅株式会社を買収し、直営事業として大阪市北区安治川上通に住友伸銅場を開設、銅電線などの製造を開始（創業）
32年3月	大阪製銅株式会社を買収し、住友伸銅場中之島分工場を開設
33年4月	被覆線の製造開始
42年10月	通信用ケーブル試作開始
44年8月	住友伸銅場より電線製造業を分離し、住友電線製造所を置く。ほぼ、あらゆる電線ケーブルの製造能力を持つにいたる（創立）
大正5年4月	エナメル線の製造開始
12月	現在の大阪製作所の地に新工場を建て移転完了
9年12月	住友総本店から分離独立、株式会社住友電線製造所に改組（設立）（資本金1千万円）
昭和6年6月	イゲタロイ（超硬工具）の製造開始
10月	東海電線株式会社（現・住友電装株式会社）に資本参加
7年9月	耐酸ニッケル線など特殊金属線の製造開始
12年10月	東海護謨工業株式会社（現・住友理工株式会社）に資本参加
14年11月	社名を住友電気工業株式会社（現社名）と改称
16年3月	伊丹市に伊丹製作所を開設
18年1月	防振ゴム、続いて燃料タンクの製造開始
21年1月	東京支店（現本社（東京））、名古屋出張所（現中部支社）及び福岡出張所（現九州支店）を開設
23年11月	焼結製品の販売開始
24年5月	株式を東京・大阪・名古屋の各証券取引所に上場
6月	架空送電線工事部門に進出
28年4月	太陽電設工業株式会社（現・住友電設株式会社）に資本参加
36年5月	横浜市に横浜製作所を開設
37年2月	電子線照射イラックスチューブの製造開始
7月	本社を大阪市此花区より現在地（大阪市中心区）に移転
38年6月	ディスクブレーキの製造開始
39年8月	電子線照射電線の製造開始
43年7月	交通管制システムを事業化
45年6月	化合物半導体の製造開始
49年12月	光ファイバ・ケーブルの製造開始
50年5月	営業年度を年1回に変更（毎年4月1日～翌年3月31日）
51年12月	ナイジェリア大規模通信網工事を受注
54年4月	当社初の時価発行増資を実施
56年3月	光LANシステム初納入
60年4月	合成ダイヤモンド単結晶製品の事業化
61年6月	米国にスミトモ エレクトリック ワイヤリング システムズ インク設立
平成6年2月	米国にスミトモ エレクトリック ライトウェーブ コーポレーション設立
11年7月	住友電工ブレーキシステムズ株式会社にブレーキ・ABS事業を営業譲渡
7月	高分子機能製品事業を分社化した住友電工ファイナポリマー株式会社が営業開始
13年10月	株式会社ジェイ・パワーシステムズに高圧電力用電線事業を営業譲渡
14年8月	ADS L事業等を会社分割して新設した住友電工ネットワークス株式会社が営業開始
10月	特殊金属線事業を会社分割して新設した住友電工スチールワイヤー株式会社が営業開始
10月	巻線事業を会社分割し、住友電工ウインテック株式会社に承継
15年1月	建設・電販向け電線事業を営業譲渡した住電日立ケーブル株式会社が営業開始
4月	粉末合金・ダイヤ製品事業を会社分割して新設した住友電工ハードメタル株式会社が営業開始
6月	執行役員制導入
7月	事業本部制導入
18年3月	ドイツの自動車用ワイヤーハーネスメーカー（現・スミトモ エレクトリック ボードネットエクスエー）を買収
19年8月	住友電装株式会社を完全子会社化
12月	日新電機株式会社を連結子会社化
21年8月	光・電子デバイス事業の組織再編により住友電工デバイス・イノベーション株式会社が発足
26年4月	株式会社ジェイ・パワーシステムズを完全子会社化
11月	住電日立ケーブル株式会社を連結子会社化

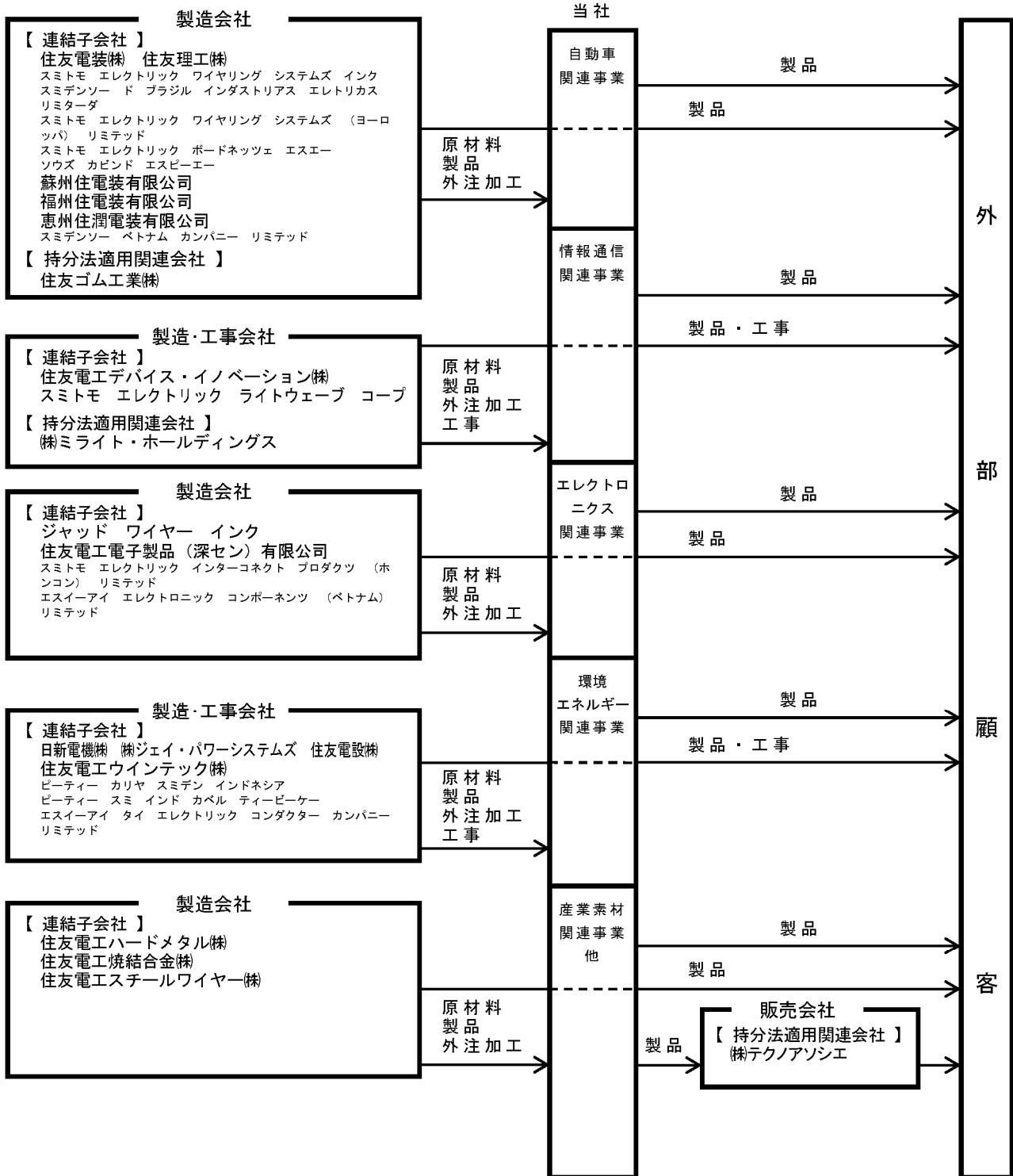
3【事業の内容】

当社グループ（当社及び当社の関係会社）においては、自動車関連事業、情報通信関連事業、エレクトロニクス関連事業、環境エネルギー関連事業、産業素材関連事業他の5部門にわたって、製品の開発、製造、販売、サービス等の事業活動を展開しております。

各事業における、当社及び当社の関係会社の位置付け等は次のとおりであります。

区分	主要製品	主要な関係会社
自動車 関連事業	ワイヤーハーネス、 防振ゴム・自動車用ホース、 自動車電装部品	当社 〔国内連結子会社〕 住友電装(株)、住友理工(株) 〔在外連結子会社〕 スミトモ エレクトリック ワイヤリング システムズ インク、 スミデンソー ド ブラジル インダストリアス エレト리카ス リ ミターダ、 スミトモ エレクトリック ワイヤリング システムズ (ヨーロッ パ) リミテッド、 スミトモ エレクトリック ボードネツェ エスエー、 ソウズ カビンド エスピーエー、 蘇州住電装有限公司、 福州住電装有限公司、 惠州住潤電装有限公司、 スミデンソー ベトナム カンパニー リミテッド 〔国内持分法適用関連会社〕 住友ゴム工業(株)
情報通信 関連事業	光ファイバ・ケーブル、 通信用ケーブル・機器、 光融着接続機、 光データリンク・無線通信用 デバイスなどの光・電子デバ イス製品、化合物半導体、 アクセス系ネットワーク機器 (GE-PON・セットトッ プボックス・CATV関連製 品等)・交通制御などのネッ トワーク・システム製品	当社 〔国内連結子会社〕 住友電工デバイス・イノベーション(株) 〔在外連結子会社〕 スミトモ エレクトリック ライトウェーブ コープ 〔国内持分法適用関連会社〕 (株)ミライト・ホールディングス
エレクトロニ クス関連事業	電子ワイヤー、 電子線照射製品、 フレキシブルプリント回路、 ふっ素樹脂製品	当社 〔在外連結子会社〕 ジャッド ワイヤー インク、 住友電工電子製品(深セン)有限公司、 スミトモ エレクトリック インターコネクト プロダクツ (ホン コン) リミテッド、 エスイーアイ エレクトロニック コンポーネンツ (ベトナム) リミテッド
環境 エネルギー 関連事業	導電製品、送配電用電線・ ケーブル・機器、巻線、 空気ばね、受変電設備・制御 システムなどの電力機器、 ビーム・真空応用装置、 電気・電力工事及びエンジニ アリング、金属多孔体、 電子部品金属材料	当社 〔国内連結子会社〕 日新電機(株)、(株)ジェイ・パワーシステムズ、住友電設(株)、 住友電工ウインテック(株) 〔在外連結子会社〕 ピーティアー カリヤ スミデン インドネシア、 ピーティアー スミ インド カベル ティービーケー、 エスイーアイ タイ エレクトリック コンダクター カンパニー リミテッド
産業素材 関連事業他	P C鋼材、精密ばね用鋼線、 スチールコード、超硬工具、 ダイヤモンド・CBN工具、 レーザ用光学部品、 焼結部品、半導体放熱基板	当社 〔国内連結子会社〕 住友電工ハードメタル(株)、住友電工焼結合金(株)、 住友電工スチールワイヤー(株) 〔国内持分法適用関連会社〕 (株)テクノアソシエ

主要な関係会社を事業系統図に示すと以下のとおりであります。



4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業の 内容	議決権に 対する 所有割合 (%)	関係内容					
					役員の兼任等			資金援助	営業上の取引他	
					当社 役員 (人)	当社 職員 (人)	転籍 (人)			
(連結子会社) 住友電装(株) ※1	三重県四日市 市	20,042	自動車関連事 業	100.0	1	2	0	貸付金、 債務保証	芯線の販売先並びに自動車 用ワイヤーハーネスの仕入 先	
住友電工デバイス・イ ノベーション(株) ※1	横浜市栄区	15,000	情報通信関連 事業	100.0	0	9	0	貸付金	半導体デバイスの仕入先	
住友理工(株) ※1、※2	愛知県小牧市	12,145	自動車関連事 業	50.7 (1.0)	0	1	4	なし	空気バネ用部品の仕入先	
日新電機(株) ※1、※2	京都市右京区	10,253	環境エネルギ ー関連事業	51.5	0	0	6	なし	電線ケーブルの販売先	
(株)ジェイ・パワース テムズ	茨城県日立市	8,000	環境エネルギ ー関連事業	100.0	0	7	0	貸付金、 債務保証	芯線の販売先並びに電力ケ ーブル及び付属品等の仕入 先	
住友電工 ハードメタル(株)	兵庫県伊丹市	8,000	産業素材関連 事業他	100.0	1	6	0	貸付金	超硬合金素材の販売先並び に超硬工具及びダイヤモンド・C BN工具等の仕入先	
住友電設(株) ※2	大阪市西区	6,440	環境エネルギ ー関連事業	50.3 (0.1)	0	0	5	なし	送配電線・通信システム工 事の外注先	
住友電工焼結合金(株)	岡山県高梁市	3,004	産業素材関連 事業他	100.0	1	4	0	貸付金	焼結部品の仕入先	
住友電工 スチールワイヤー(株)	兵庫県伊丹市	3,000	産業素材関連 事業他	100.0	0	4	0	貸付金	ワイヤーロッドの販売先並 びに特殊金属線の仕入先	
住友電工 ウインタック(株)	滋賀県甲賀市	3,000	環境エネルギ ー関連事業	100.0	0	5	2	貸付金	ワイヤーロッドの販売先並 びに巻線の仕入先	
スミトモ エレクトリ ック ワイヤリング システムズ インク ※1	米国ケンタッ キー州	千米ドル 143,920	自動車関連事 業	100.0 (40.0)	1	3	0	なし	自動車用ワイヤーハーネス 用部品の販売先	
スミトモ エレクトリ ック ライトウェーブ コープ	米国ノースカ ロライナ州	千米ドル 54,780	情報通信関連 事業	100.0 (100.0)	1	4	0	なし	光ファイバ・ケーブル、融 着機、コネクタ製品等の販 売先	
ジャッド ワイヤ ーインク	米国マサチュ ーセッツ州	千米ドル 40,000	エレクトロニ クス関連事業	100.0 (100.0)	0	4	0	なし	電子ワイヤーの販売先	
スミデンソー ド ブ ラジル インダストリ アス エレトリカス リミターダ	ブラジル ミ ナスジェライ ス州	千ブラジ ルリアル 162,921	自動車関連事 業	100.0 (60.72)	0	0	0	債務保証	なし	
スミトモ エレクトリ ック ワイヤリング システムズ (ヨーロッ パ) リミテッド ※1	英国スタッフォ ードシャー州	千ユーロ 84,024	自動車関連事 業	100.0 (40.0)	0	4	0	債務保証	自動車用ワイヤーハーネス 用部品の販売先	
スミトモ エレクトリ ック ボードネット エスエー	ドイツ ウォ ルフスブルグ 市	千ユーロ 2,046	自動車関連事 業	100.0 (40.0)	0	2	0	債務保証	なし	
ソウズ カビン ド エスピー エー	イタリア コレーニョ市	千ユーロ 30,000	自動車関連事 業	100.0 (40.0)	1	2	0	債務保証	なし	
ピーティー カリヤ スミデン イン ドネシア	インドネシア タンゲラン市	千米ドル 32,109	環境エネルギ ー関連事業	100.0 (4.5)	0	6	0	債務保証	銅カソードの販売先	
ピーティー スミ インド カ ベル ティ ーピー ケー	インドネシア タンゲラン市	千米ドル 52,431	環境エネルギ ー関連事業	92.4 (0.2)	1	4	0	債務保証	電線ケーブルの仕入先	
エスイーアイ タイ エレクトリック コンダクター カンパニー リミテッド	タイ ラヨーン県	百万バーツ 2,010	環境エネルギ ー関連事業	100.0 (0.0)	0	7	1	債務保証	銅カソード・アルミ地金の 販売先並びにアルミ製品仕 入先	
住友電工電子製品(深 セン)有限公司	中国広東省 深セン市	千人民元 623,483	エレクトロニ クス関連事業	100.0 (100.0)	1	5	0	債務保証	なし	

名 称	住 所	資本金 (百万円)	主要な事業の 内容	議決権に 対する 所有割合 (%)	関 係 内 容				
					役員の兼任等			資金援助	営業上の取引他
					当社 役員 (人)	当社 職員 (人)	転籍 (人)		
蘇州住電装有限公司	中国江蘇省 蘇州市	千人民元 347,585	自動車関連事 業	100.0 (100.0)	0	0	0	なし	なし
福州住電装有限公司	中国福建省 福州市	千人民元 275,236	自動車関連事 業	100.0 (100.0)	0	0	0	債務保証	なし
惠州住潤電装有限公司	中国広東省 惠州市	千人民元 288,020	自動車関連事 業	87.9 (87.9)	0	0	1	なし	なし
スミトモ エレクトリ ック インターコネク ト プロダクツ (ホン コン) リミテッド	中国 (香港)	千香港ドル 648,000	エレクトロニ クス関連事業	100.0	0	5	0	債務保証	電子ワイヤー・フレキシブ ルプリント回路の仕入先
エスイーアイ エレク トロニック コンポー ネンツ (ベトナム) リ ミテッド	ベトナム ハノイ市	千米ドル 70,000	エレクトロニ クス関連事業	100.0	1	3	0	貸付金、 債務保証	フレキシブルプリント回路 半製品等の販売先並びに仕 入先
スミデンソー ベトナ ム カンパニー リミ テッド	ベトナム ハイドゥン省	千米ドル 35,000	自動車関連事 業	100.0 (100.0)	0	0	1	債務保証	なし
その他 330社									
(持分法適用関連会社) 住友ゴム工業㈱ ※2	神戸市中央区	42,658	自動車関連事 業	28.84 (0.1)	1	0	2	なし	スチールコードの販売先
㈱ミライト・ホールデ ィングス ※2	東京都江東区	7,000	情報通信関連 事業	23.9 (3.4)	0	0	0	なし	なし
㈱テクノアソシエ ※2	大阪市西区	5,001	産業素材関連 事業他	35.7 (0.0)	0	1	4	なし	超硬合金・化合物半導体等 の販売先
その他 34社									

- (注) 1. 「主要な事業の内容」欄には、セグメントの名称を記載しております。
2. 「議決権に対する所有割合」欄の () は、間接所有割合を内数で示しております。
3. ※1：特定子会社に該当しております。
4. ※2：有価証券報告書を提出しております。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

(平成29年3月31日現在)

セグメントの名称	従業員数 (人)	
自動車関連事業	187,815	(29,233)
情報通信関連事業	6,734	(1,445)
エレクトロニクス関連事業	25,852	(2,422)
環境エネルギー関連事業	13,077	(2,581)
産業素材関連事業他	14,852	(2,487)
合計	248,330	(38,168)

(注) 従業員数は就業人員数(当社グループからグループ外への出向者を除き、グループ外から当社グループへの出向者を含む。)であり、臨時従業員数(パートタイマー、アルバイト、定年退職後再雇用者、人材会社からの派遣社員を含む。)は、年間の平均人員を()内に外数で記載しております。

(2) 提出会社の状況

(平成29年3月31日現在)

従業員数 (人)	平均年齢 (歳)	平均勤続年数 (年)	平均年間給与 (円)
5,034(959)	42.0	17.4	7,940,000

セグメントの名称	従業員数 (人)	
自動車関連事業	348	(52)
情報通信関連事業	1,310	(403)
エレクトロニクス関連事業	280	(27)
環境エネルギー関連事業	1,120	(194)
産業素材関連事業他	1,976	(283)
合計	5,034	(959)

(注) 1. 従業員数は就業人員数(当社から社外への出向者を除き、社外から当社への出向者を含む。)であり、臨時従業員数(パートタイマー、アルバイト、定年退職後再雇用者、人材会社からの派遣社員を含む。)は、年間の平均人員を()内に外数で記載しております。

2. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。

(3) 労働組合の状況

当社の労働組合は、上部団体である全日本電線関連産業労働組合連合会(日本労働組合総連合会加盟)に所属しております。なお、当社における労使関係は安定しており、特記すべき事項はありません。

第2【事業の状況】

1【業績等の概要】

(1) 業績

当連結会計年度の世界経済は、概ね緩やかな回復傾向が続いたものの、英国のEU離脱問題や米国の新政権発足による不確実性の高まり、新興国経済の成長鈍化による影響懸念などから、先行きへの不透明感が強まっています。

日本経済も、個人消費が伸び悩み、足踏み状態となりました。

当社グループを取り巻く事業環境につきましては、海外を中心に自動車用ワイヤーハーネスや光ファイバ・ケーブル、光・電子デバイス等の需要は堅調であったものの、携帯機器用FPC（フレキシブルプリント回路）の需要減少、及び円高や銅価格下落の影響が大きく、厳しいものとなりました。このような環境のもと、当連結会計年度の連結決算は、売上高は2,814,483百万円（前連結会計年度2,933,089百万円、4.0%減）と前連結会計年度比で減少しましたが、利益面では、グローバルでのコスト低減、新製品の開発・拡販を進め、営業利益は150,503百万円（前連結会計年度143,476百万円、4.9%増）、経常利益は173,872百万円（前連結会計年度165,658百万円、5.0%増）、親会社株主に帰属する当期純利益は107,562百万円（前連結会計年度91,001百万円、18.2%増）と、それぞれ前連結会計年度に比べ増益となりました。

セグメントの業績は、次のとおりであります。

自動車関連事業

ワイヤーハーネスや自動車電装部品、防振ゴムで新規車種への採用拡大などグローバルでの需要捕捉を積極的に進め、特に中国をはじめとする海外での販売数量が増加した一方で、円高や銅価格下落の影響を受け、売上高は1,513,221百万円と28,764百万円（1.9%）の減収となりました。営業利益は98,616百万円と、円高の影響があったものの、グローバル生産拠点でのコスト低減を進め、9,962百万円の増益となりました。売上高営業利益率は6.5%と0.8ポイント上昇しました。

情報通信関連事業

円高の影響を受けたものの、光ファイバ・ケーブル、光・電子デバイスにおいて中国や米国をはじめとする海外を中心に需要が増加し、売上高は198,240百万円と13,552百万円（7.3%）の増収となりました。営業利益も21,509百万円と、需要増加に加え、データセンター向け光ケーブルの需要捕捉による採算改善やコスト低減を進めたことにより、9,606百万円の増益となりました。売上高営業利益率は10.8%と4.4ポイント上昇しました。

エレクトロニクス関連事業

電子ワイヤーで新規需要開拓により販売数量が増加した一方で、携帯機器用FPCの需要減少及び新製品生産立ち上げ遅れによる販売数量減少や価格競争激化に加え、円高の影響もあり、売上高は251,113百万円と60,908百万円（19.5%）の減収となりました。営業損失も10,898百万円と、FPCの生産量減少に伴う採算悪化の影響もあり、21,101百万円の大幅な悪化となりました。

環境エネルギー関連事業

主に銅価格下落の影響のため、売上高は621,418百万円と38,125百万円（5.8%）の減収となりました。営業利益は20,807百万円と、住友電設(株)の海外子会社で過年度の不適切会計の修正処理による損失計上があった一方で、電力ケーブルでのコスト低減、日新電機(株)で高精細・中小型FPD（フラットパネルディスプレイ）製造用イオン注入装置の需要捕捉及び採算改善が進んだことなどにより、7,403百万円の増益となりました。売上高営業利益率は3.3%と1.3ポイント上昇しました。なお、工事・プラント受注高は293,044百万円と、前連結会計年度比26,922百万円（8.4%）減少しました。

産業素材関連事業他

円高の影響などにより、売上高は303,943百万円と8,211百万円（2.6%）の減収となりました。営業利益は20,491百万円と、前連結会計年度は(株)アライドマテリアルでタングステン及びモリブデン相場下落に伴う原材料の時価評価損の計上があったほか、スチールコードで海外でのコスト低減を進め採算が改善したことなどにより、1,257百万円の増益となりました。売上高営業利益率は6.7%と0.5ポイント上昇しました。

なお、各セグメントの営業利益又は営業損失は、連結損益計算書の営業利益又は営業損失に対応しております。

(2) キャッシュ・フロー

当連結会計年度末における現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は、前連結会計年度末より5,947百万円増加し、180,002百万円となりました。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度の営業活動の結果得られた資金は、209,233百万円（前連結会計年度比31,546百万円の収入減少）となりました。これは、税金等調整前当期純利益167,792百万円や減価償却費130,700百万円などから運転資本の増減を差し引いたことなどによるものです。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度の投資活動の結果使用した資金は、194,829百万円（前連結会計年度比77,442百万円の支出増加）になりました。これは、設備投資に伴う有形固定資産の取得による支出175,170百万円などがあったことによるものです。

なお、営業活動によるキャッシュ・フローから投資活動によるキャッシュ・フローを差し引いたフリー・キャッシュ・フローについては、14,404百万円のプラス（前連結会計年度は123,392百万円のプラス）となりました。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度の財務活動の結果、資金は4,763百万円減少（前連結会計年度は115,912百万円の減少）しました。これは、社債の発行による収入の一方、自己株式の取得による支出や配当金の支払などによるものです。

(注) 本報告書の「第2 事業の状況」から「第5 経理の状況」までの金額には、特に記載のない限り消費税及び地方消費税は含まれておりません。

2 【生産、受注及び販売の状況】

当社及び連結子会社の生産・販売品目は広範囲かつ多種多様であり、同種の製品であっても、その容量、構造、形式等は必ずしも一様ではなく、また受注生産形態をとらない製品も多く、セグメントごとに生産規模及び受注規模を金額あるいは数量で示すことはしていません。

このため生産、受注及び販売の状況については、「1. 業績等の概要」におけるセグメントの業績に関連付けて示しております。

3 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 会社の経営の基本方針

当社グループは「住友事業精神」と「住友電工グループ経営理念」のもと、公正な事業活動を通して社会に貢献していくことを不変の基本方針としております。こうした基本理念を堅持しつつ持続的に成長し、中長期的に企業価値を向上させていくためには、適正なコーポレート・ガバナンスに基づき経営の透明性、公正性を確保するとともに、イノベーションをキーワードに、保有する経営資源を最大限活用して成長戦略を果敢に立案・実行していくことが重要であり、以下の基本的な考え方に沿って、コーポレート・ガバナンスの一層の充実に取り組んでまいります。

(i) 株主がその権利を適切に行使することができる環境の整備を行う。

(ii) 株主を含むステークホルダーの利益を考慮し、それらステークホルダーと適切に協働する。

(iii) 会社情報を適切に開示し、透明性を確保する。

(iv) 取締役会の戦略等基本方針決定機能及び経営の監督機能を重視し、それらの機能の実効性が確保される体制の整備及び取締役会の運営に注力する。業務執行については、権限及び責任を明確化し、事業環境の変化に応じた機動的な業務執行体制を確立することを目的として、執行役員制並びに事業本部制を導入している。また、経営の健全性確保の観点から、監査役監査の強化を図ることとし、独立社外監査役と常勤の監査役が内部監査部門や会計監査人と連携して適法かつ適正な経営が行われるよう監視する体制としている。

(v) 持続的な成長と中長期的な企業価値の向上に資するよう、合理的な範囲で、株主との建設的な対話を行う。

〔住友事業精神〕

住友の事業は、今から約400年前、銅と銀を吹き分ける「南蛮吹き」と呼ばれる技術による銅精錬事業に遡り、その後別子銅山における鉱山業を中心に発展を遂げてきました。こうした事業の隆盛を支えてきた精神的基盤が「住友事業精神」であり、住友家初代・住友政友が後生に遺した商いの心得『文殊院旨意書』を礎とし、住友の先人により何代にもわたって深化・発展を遂げてきたものです。その要諦は、明治24年に改訂された住友家法の中で「営業の要旨」として端的に示されています。

営業の要旨 ※ここでは、住友合資会社社則(昭和3年制定)より抜粋しました。

第一条 我が住友の営業は、信用を重んじ確実を旨とし、以てその鞏固隆盛を期すべし

第二条 我が住友の営業は、時勢の変遷、理財の得失を計り、弛張興廃することあるべしと雖も、
苟も浮利に趨り、軽進すべからず

この他にも、『技術の重視』、『人材の尊重』、『企画の遠大性』、『自利利他、公私一如』といった精神が今に至るまで脈々と受け継がれています。

〔住友電工グループ経営理念〕 ※創業100周年を機に明文化（1997年6月）

住友電工グループは、

- ・顧客の要望に応え、最も優れた製品・サービスを提供します。
- ・技術を創造し、変革を生み出し、絶えざる成長に努めます。
- ・社会的責任を自覚し、よりよい社会、環境づくりに貢献します。
- ・高い企業倫理を保持し、常に信頼される会社を目指します。
- ・自己実現を可能にする、生き生きとした企業風土を育みます。

(2) 会社の対処すべき課題

今後の世界経済は、欧米における政策の不確実性、新興国経済の下振れリスク、政情不安や金融資本市場の変動による影響等により、さらに不安定となることが懸念されます。日本経済も個人消費等に力強さを欠く状態が継続し、先行き不透明な状況が続くものと予想されます。

このような情勢のもと、当社グループは、住友事業精神と住友電工グループ経営理念を根本に据え、S（安全）、E（環境）、Q（品質）、C（コスト）、D（物流・納期）、D（研究開発）のさらなる進化に努めながら、中期経営計画「17VISION」の最終年度にあたる2017年度を、中期目標の達成に向けた仕上げの年として、各事業において次の施策を進めてまいります。

まず、自動車関連事業では、グローバル総合部品メーカーを目指し、自動車の軽量化に寄与し耐久性に優れた高強度アルミハーネス、環境対応車向けの高電圧ハーネス、複雑化・高度化が進む自動車の電子制御に対応した電装部品や高速通信用コネクタなどの開発・拡販を加速してまいります。また、海外系顧客向けのさらなるシェア拡大に努めるとともに、一層のコスト低減にも注力してまいります。住友理工㈱では、自動車用防振ゴム・ホースにおいて、買収した海外事業の拠点、販路、技術などを活かして、グローバルでの拡販を図りつつ、引き続き体質強化に努めるとともに、収益力の向上に取り組んでまいります。

情報通信関連事業では、光ファイバ・ケーブル、100Gbps*の高速光デバイス、携帯基地局用GaN（窒化ガリウム）デバイスについて、海外での堅調な需要の確実な捕捉に引き続き取り組むほか、海底ケーブル用の極低損失光ファイバ、超多心光ケーブルをはじめとするデータセンター関連製品や、高度道路交通システムの拡販を一段と進めてまいります。また、アクセス系ネットワーク機器の新製品拡販にも引き続き注力し、収益力のさらなる向上を図ってまいります。

* Gbps : gigabits per secondの略で、通信速度を表す単位。1Gbpsは1秒間に10億ビットのデータを送れることを表します。

エレクトロニクス関連事業では、携帯機器用FPCについて2016年度は需要減少や競争激化に加え、新製品の生産立ち上げ遅れにより採算が厳しくなりましたが、グローバルでの徹底した品質改善・コスト低減と拡販に注力するとともに、当社グループの総合力を活かし、さらなる高精細・極薄・高耐熱化による新製品開発や車載市場等への事業拡大に取り組み、収益改善を進めてまいります。また、電子ワイヤー、照射チューブについても、グローバルでの生産強化と拡販を加速してまいります。

環境エネルギー関連事業では、2016年1月にサウジアラビアの国営石油公社サウジアラビアン・オイル・カンパニーと海底電力ケーブルの長期納入契約を締結しました。さらに2017年3月にドイツのシーメンス社と高電圧直流送電分野で連携協力することに合意しました。同社のコンバーター、当社の高圧直流電力ケーブルといった先端技術をもとに、お客様に対し最適なソリューションの提供を進め、これらの取組みにより、グローバルでの拡販を加速してまいります。また、コスト低減による収益力向上や品質の強化に引き続き取り組んでまいります。このほか、環境対応車向けのモーター用平角巻線や電池用金属多孔体の拡販を進め、さらに日新電機㈱や住友電設㈱とも連携し、再生可能エネルギーやスマートグリッド関連事業の拡大にも注力してまいります。

産業素材関連事業では、2016年9月に米国大手焼結部品メーカーであるキーストーン社を買収しましたが、これにより当社焼結部品事業の米国におけるプレゼンスを向上させ、さらなるグローバルビジネスチャンスの獲得に取り組んでまいります。超硬工具では、中国、台湾、インド等新興国市場における需要捕捉をこれまで以上に進めるとともに、引き続き原料調達体制の強化を図ってまいります。また、主力の自動車分野に加え、今後の伸長が期待される航空機や精密加工分野向けの新製品開発と拡販を加速いたします。このほか、PC鋼材やばね用鋼線についても、グローバル生産体制の拡充と拡販に注力してまいります。

研究開発では、オリジナリティがありかつ収益力に優れた新事業、新製品の創出に努めてまいります。具体的には、新しい電力・エネルギーインフラの構築に向けてレドックスフロー電池、集光型太陽光発電装置、電力線通信応用製品の事業化に向けた開発と国内外での実証試験を加速するほか、超電導製品、マグネシウム合金製品、水処理装置、SiC（シリコンカーバイド）パワー半導体デバイスや次世代通信ネットワーク用製品などの事業化に注力します。さらに将来に向けては、先進交通安全システムや新たな機能を発現する新材料の探索など、社会ニーズを踏まえ当社グループの特徴を生かした新製品の開発に注力するとともに、製造現場でのAI*やIoT*活用による生産革新、サイバーセキュリティ対策にも積極的に取り組んでまいります。

* AI : Artificial Intelligence (人工知能) の略。

* IoT : Internet of Thingsの略。パソコンやスマートフォンなどの情報通信機器に限らず、あらゆる「モノ」がインターネット等のネットワークに接続されること。

最後に、法令遵守や企業倫理の維持は、当社経営の根幹をなすものであり、企業として存続・発展するための絶対的な基盤と考えております。なかでも競争法コンプライアンスは最重要の課題と位置付け、2010年6月に「競争法コンプライアンス規程」を制定して以来、グループ全体でその強化に取り組んでまいりました。今後も、住友事業精神の「萬事入精(ばんじにっせい)」「信用確実」「不趨浮利(ふすうふり)»*という理念のもと、社会から信頼される公正な企業活動の実践に真摯に取り組んでまいります。

* 萬事入精：まず一人の人間として、何事にも誠心誠意を尽くすべきとの考え。

信用確実：何よりも信用を重んじること。

不趨浮利：常に公共の利益との一致を求め、一時的な目先の利益、不当な利益の追求を厳に戒めること。

4 【事業等のリスク】

当社グループの経営成績及び財政状態等に影響を及ぼす可能性のある主要なリスクには、以下のようなものがあります。文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(政治経済情勢・需要変動等に係るリスク)

当社グループは、自動車関連、情報通信関連、エレクトロニクス関連、環境エネルギー関連及び産業素材関連他の各需要分野にわたって事業を展開しております。また、地域的には、日本の他、米州、アジア、欧州、北アフリカ等に進出しております。このため、当社グループの経営成績、財政状態ならびにキャッシュ・フローは、特定の取引先・製品・技術等に過度に依存する状況にはありませんが、各分野や各地域に特有の需要変動や、技術革新に起因する製品ライフサイクル短期化、また、各国の政治情勢などの影響を受けることがあります。なお、当社グループ製品の多くは、最終消費財の部品や社会インフラ用の素材・システムなどであるため、景気循環の影響を受けることはもとより、顧客の購買政策の変化や設備投資に対する政策的判断などの影響を受けることがあります。

(法律・規制の変更等によるリスク)

当社グループは、日本以外にも世界各地に製造子会社、販売子会社等を有しております。各市場において、下記のように完全には回避することの困難なリスクが存在しており、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

- ・ 輸入規制や関税率の引き上げ等により、売上が減少、もしくは原価率が悪化するリスク
- ・ 各国の国内及び国際間取引に係る租税制度の変更等により税金コストが上昇するリスク
- ・ 外貨規制、ハイパーインフレーション、テロ、新型インフルエンザ等の感染症等により投資資金の回収が不可能となるリスク

(訴訟、規制当局による措置その他の法的手続に係るリスク)

当社グループは、事業を遂行するうえで、訴訟、規制当局による措置その他の法的手続に関するリスクを有しております。訴訟、規制当局による措置その他の法的手続により、当社グループに対して損害賠償請求や規制当局による金銭的な賦課を課され、又は事業の遂行に関する制約が加えられる可能性があり、かかる訴訟、規制当局による措置その他の法的手段は、当社グループの事業、業績及び財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

なお、自動車関連事業分野の競争法違反行為について、一部の自動車メーカーと損害賠償に関する交渉を行っております。

(災害等のリスク)

当社グループは、阪神・淡路大震災や東日本大震災により被害を受けた経験を踏まえ、地震等の防災対策を実施しております。当社グループの拠点の一部は、南海トラフ地震や首都直下地震の想定被災地域あるいは沿岸地域等に存在していることもあり、大規模な地震が発生した場合には津波や液状化等による重大な被害を受ける可能性があります。また、グローバルな事業展開を拡大していることから、各国・各地域において地震や風水害等の直接的な被害を受ける可能性があることに加え、顧客の被災や物流網の寸断、電力不足等により生産活動が計画通り進まない可能性があります。

(産業事故等のリスク)

当社グループの製造拠点において、火災・爆発等の産業事故や環境汚染等の公害事故が発生し、当社グループの業務及び地域社会に大きな影響を及ぼした場合、これに伴い生ずる社会的信用の失墜、補償等を含む事故対応費用、生産活動の停止による機会損失及び顧客に対する補償等により、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(金利の変動によるリスク)

当社グループは、資金需要、金融市場環境及び調達手段のバランスを考慮し資金調達を実施しております。当社グループでは、設備投資のための長期安定的な資金を必要とするため、長期固定金利の長期借入や社債発行による調達を中心となっております。そのため、金利の短期的な変動による影響は比較的受けにくくなっておりますが、金利が中長期的に上昇した場合は、長期借入等による資金調達コストを上昇させ、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(為替レートの変動によるリスク)

当社グループは、在外連結子会社及び在外持分法適用関連会社の個別財務諸表を主に現地通貨ベースで作成しており、連結財務諸表の作成時に円換算しております。従って、現地通貨ベースでの業績に大きな変動がない場合でも、円換算時の米国ドル、ユーロ等の為替レート変動が業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

また、当社グループは世界各地で製造・販売活動を展開しております（当連結会計年度における海外売上高比率58.8%）。為替予約取引等の手段により主要通貨の短期的な為替変動による影響を最小限にとどめるようにしておりますが、中長期にわたる大幅な為替変動は、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(原材料等の調達に係るリスク)

当社グループは、電線・ケーブルなど銅を主たる原材料とした製品を多数有しております。このうち主要な製品の販売価格については、ロンドン金属取引所の市況価格を反映した銅建値に基づいて決定するという商慣習が普及しており市況価格変動リスクを回避しております。しかし一部の製品についてはこのような価格決定方法を採用していないため、急激な市況価格の上昇は、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

その他の非鉄金属、鉄鋼、石油化学製品類等の原材料や副資材の調達についても、当社グループでの共同購買など有利購買活動を強化しておりますが、急激な市況価格の上昇が当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。さらに、原材料等の在庫について、市場価格の急落が、当社グループの業績及び財務状態に影響を及ぼす可能性があります。また希少金属については、産地や供給者が限定されていること等により必要量の調達が困難となる可能性があります。さらに、他の原材料や副資材についても、供給者の倒産、自然災害、戦争、テロ、ストライキ、交通機能の障害等により、必要量の調達が困難となる可能性があります。

(保有有価証券の時価の下落によるリスク)

当社グループは、取引先との長期的・安定的な関係の構築・強化や、事業・技術提携の円滑化を主たる目的として、関係取引先等の株式を保有しております。売買目的の株式は保有していないため、株式市況の変動が経営に直接与えるリスクは比較的小さいと考えられますが、大幅な株式市況の悪化は自己資本比率を低下させる可能性があります。

(退職給付債務に係るリスク)

当社グループは、従業員の退職給付債務及び費用について、割引率等数理計算上で設定される前提条件や年金資産の長期期待運用収益率に基づき算出しております。実際の結果が前提条件と異なる場合、又は前提条件が変更された場合、具体的には、株式や債券等の価格下落に伴う年金資産の時価減少や、長期金利の低下に伴う割引率の引き下げなどにより、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(知的財産に係るリスク)

当社グループは、特許権、意匠権、その他の知的財産権の取得により自社技術の保護を図ると共に、他社の知的財産権に対しても細心の注意を払っております。しかし、製品の構造・製造技術の多様化や、海外での事業活動の拡大、それに伴う流通経路の複雑化等により、当社グループの製品が意図せず他社の知的財産権を侵害した場合、販売中止、設計変更等の処置をとらざるを得ない可能性があります。また、各国の法制度や執行状況の相違により、他社が当社グループの知的財産権を侵害しても常に必要な保護が得られるとは限らず、当社グループの製品が十分な市場を確保できない可能性があります。

(情報の流出によるリスク)

当社グループは、事業遂行に関連して多くの個人情報や機密情報を有しております。

これらの情報の秘密保持については、最大限の対策を講じておりますが、予期せぬ事態により、情報が外部に流出する可能性は皆無ではありません。このような事態が生じた場合、当社グループのイメージの低下や損害賠償の発生などにより、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(製品およびサービスの欠陥によるリスク)

当社グループは、所定の品質基準に基づき、製品およびサービスの品質保持に万全の注意を払っておりますが、予期せぬ事態により、大規模なリコールや製造物責任賠償につながるような品質問題が発生する可能性は皆無ではありません。このような事態が生じた場合、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

5 【経営上の重要な契約等】

当連結会計年度において、経営上の重要な契約等の決定又は締結等はありません。

6 【研究開発活動】

当社及び連結子会社は「技術を創造し、変革を生み出し、絶えざる成長に努めます」という経営理念の下、伸長分野に焦点を合わせ、オリジナリティがありかつ収益力のある新事業・新製品の開発に努めております。また、将来の技術ニーズを踏まえ、当社グループの次代の成長を担う新規研究テーマの発掘・育成にも積極的に取り組んでおります。

自動車関連事業、情報通信関連事業、エレクトロニクス関連事業、環境エネルギー関連事業、産業素材関連事業他の各事業分野における当連結会計年度の主な成果は以下のとおりであります。

また、当連結会計年度における研究開発費の総額は115,155百万円であります。

(1) 自動車関連事業

ワイヤーハーネス及び車載エレクトロニクス機器については、当社、住友電装㈱及び両社の共同出資による㈱オートネットワーク技術研究所を中心に、当社固有の材料技術・解析技術を活かして安全、快適、環境のニーズに対応した新製品の開発を行っております。

ワイヤーハーネスについては、次世代車載システムにパワー供給や情報伝送するためのハーネスアーキテクチャを構築し、それに必要な要素技術の開発を進めております。また、環境対応としてハーネスの軽量化に取り組んでおり、銅に比べ軽量なアルミを使ったワイヤーハーネスの量産、さらに高強度な電線の開発によるエンジンルーム等への適用範囲拡大を進めております。市場規模が拡大してきた電気自動車（EV）・ハイブリッド自動車（HEV）用高圧ハーネスやコネクタ、バッテリー内配線モジュールの開発等にも取り組んでおります。車載エレクトロニクス機器に関しては、電源系、情報系のネットワーク化に対応すべく、電源制御機器や半導体デバイス、ボディ制御ECU、さらにゲートウェイなど、次世代車載LAN（Local Area Network）製品の開発を進めております。

一方、新製品の開発効率化や高いレベルの品質確保に向け、要素技術開発や信頼性確保に不可欠な試験・分析・評価・解析技術の開発を推進しております。環境試験装置や分析装置等の評価設備の充実を図るとともに、CAE（Computer-Aided Engineering）技術を用いたシミュレーション技術も充実させております。

住友理工(株)では、事業を取り巻く環境がダイナミックに変化する中、将来の成長・発展に結びつく新事業の創出に向けて、コア技術である高分子材料技術と総合評価技術をベースに外部技術の融合・協業を促進し、スピーディーな新技術の創出とタイムリーな商品開発を目指しており、既存事業のコア技術を進化させる材料技術研究所と、先行技術研究所に体制を変更しました。自動車分野においては、新規顧客開拓を推進する体制を整え、「防振ゴム」「ホース」「ウレタン製品(制音品・内装品)」の既存3分野以外の自動車用新商品を開発・育成していくために、「自動車新商品開発センター」を設置しました。体圧を検知する「スマートラバー(SR)センサ」を自動車のシートに埋め込み、呼吸や心拍などのバイタル情報によってドライバーの異変を検知、危険を回避する乗員状態検知機能の実用化に向けた開発や、EV及び燃料電池自動車(FCV)向けの環境対応製品の技術開発などにも取り組んでおります。

当事業に係る研究開発費は70,894百万円であります。

(2) 情報通信関連事業

光通信関連製品、ネットワーク・システム製品などの分野において、総合的に研究開発を行っております。

光通信関連製品では、光ファイバ通信のさらなる高速化・長距離化に向けて、海底ケーブル用途の低損失低非線形光ファイバの研究開発を進め、量産安定化技術とさらなる特性向上に取り組んでおります。その一例として、2016年度は光ファイバの低損失世界記録更新に成功し、2017年3月に光通信関係の国際学会(OFC)での発表とプレスリリースを行いました。

また、伝送容量の飛躍的な拡大に向けて、1本の光ファイバに複数本のコアが形成されたマルチコア型光ファイバの開発に取り組み、光ファイバ構造・製造方法の検討、複数のコアへの光入出力デバイスなど、実用上の課題解決に向けた研究を進めております。

一方で、データセンタにおける情報機器内や情報機器間的高速大容量伝送に適した光配線製品を従来のテレコム光通信で培った技術で開発を進めております。特に、データセンタ内で使用される新型光コネクタや情報機器内の高密度光配線を実現する光部品などの製品開発を進めております。

これらの一例として、上記マルチコア型光ファイバと高密度光コネクタを組み合わせ、世界最高となる256コアを一括接続できる超高密度多心光コネクタも実現可能であることを2017年3月のOFCで発表しました。

そのほか、光ファイバ製造技術を活用した新材料の開発、光ファイバ実装・光学設計などの基盤技術を活用した新製品の開発を進めており、エレクトロニクス、環境・エネルギー、ライフサイエンスなどの新たな分野への光技術の展開を図っております。

デバイス関連分野では、数十mの短距離伝送から数千kmの長距離伝送に対応するハイエンドの光通信デバイス及び高効率、高出力特性を有する無線通信用電子デバイス技術を活かして、新製品をいち早く市場に投入することにより、事業拡大に努めております。

光通信用デバイス関連製品においては、イーサネットに代表される支線系用10/100Gbpsの製品開発を終え、100Gbps対応では、さらなる小型省電力化、長距離化を目指し、開発を継続しております。高性能受発光素子、広帯域内製IC、波長多重機能を高密度集積した超小型光サブアセンブリ(OSA)を開発し、CFP4/QSFP28(現行製品比、容積約1/10、消費電力約1/3)と呼ばれる光トランシーバを製品化するとともに、次世代の400Gbps対応開発も進めております。数百kmから数千kmの幹線系対応として、コヒーレント伝送デバイスを開発しております。波長多重技術を用いることにより、数Tbps伝送を可能とします。構成要素である波長可変半導体レーザ、光多値位相変調デバイス、ホモダイン光受信デバイスは、化合物半導体を用いた光集積回路技術を用いて製品化しつつあります。それらを用いた光トランシーバの開発も進めております。ごく短距離の数十mの建屋内配線市場においても、100Gbps以上の大容量化が検討されており、キーデバイスとなる超低消費電力で光学実装性の優れた面発光型半導体レーザ(VCSSEL)の高速化、多波長化を進めております。

無線通信デバイス関連製品では、世界に先駆けて高効率・高出力のGaN(窒化ガリウム)トランジスタを開発し、携帯基地局用途に製品化しました。本製品は低消費電力化やLTEへの移行など市場の要請に合致し、国内外で既存のSi(シリコン)トランジスタからGaNへの移行を牽引しました。現在は、LTEに次ぐ第5世代携帯無線用途を見据え、更なる効率改善を図るとともに、微細化技術開発を推し進めることにより、20GHzから80GHz帯までを視野に入れた高周波/広帯域化を実現する計画としております。

さらに、レーダ用途を目指し10GHz帯での高出力・高効率化を図るとともに、20GHz帯、80GHz帯(ミリ波帯)でのMMIC(Microwave Monolithic IC)の開発を進めております。これらのデバイスは、小型化、経済化を目指した、当社独自の3次元配線技術及びWLCSP(Wafer Level Chip Size Package)の特徴を生かして、適用領域の拡大、新規分野への展開を進めてまいります。

これらデバイス技術の蓄積を活かし、ライフサイエンス、環境関連、インフラや工業プロセス管理など多様な分野への応用が期待できる高感度な近赤外イメージセンサ(~3μm)の実用化開発を行うとともに、さらなる用途拡大を目指し、中赤外領域(3μm~)の量子カスケードレーザ(QCL-LD)、超格子型イメージセンサの開発も進めております。

ネットワーク・システム関連分野では、情報通信技術の革新により、安全・安心・快適かつ持続可能な社会の実現を目指した情報通信機器の研究開発を推進しております。

有線通信システム関連では、10G-EPON等、より高速化した次世代システムの研究開発に、無線通信システム関連では、携帯基地局向けの高周波増幅器モジュールの開発と第5世代通信システム向けの新製品の検討に取り組んでおります。交通インフラ関連では、信号制御アルゴリズム、自動走行支援を含む高度走行支援システムの開発を行っております。生産技術分野では、IoTに向けた高度なサービス実現の基盤となる省電力無線センサ技術、AI・データ分析技術を用いた設備故障の予兆診断等の研究にも取り組んでおります。また、超高精細映像技術分野では、8Kの普及促進に向け、大容量画像の圧縮伝送技術に取り組んでおります。

当事業に係る研究開発費は16,931百万円であります。

(3) エレクトロニクス関連事業

マイクロ・ナノテクノロジーを駆使して、広範な新材料や部品の開発を行っております。

化合物半導体では、情報通信を支える高速通信用の光デバイスや無線通信用電子デバイスなどに用いられるインジウムリン及びガリウムヒ素系エピタキシャルウエハの新製品開発を進めております。また、青紫色レーザダイオード、白色LEDやパワーデバイス等に応用されるGaIn基板の高品質化に加え、それら材料からデバイス技術の研究とその応用製品の開発も行っております。これまでの発光特性と高周波特性に着眼した材料開発に加え、さらに、全く新しい機能を有する光デバイスや電子デバイス用途の半導体材料の開発にも取り組んでおります。

エレクトロニクス関連部材では、独自の液相還元プロセスで合成した金属ナノ粒子粉末を用いた回路形成用ナノインク及び高精度印刷技術による微細回路基板を開発しており、携帯電子機器用の次世代微細回路基板への応用開発を行っております。さらに、固有の絶縁材料技術や接着材料技術を活用した車載向けの高耐熱性電子回路基板、配線部材の開発にも取り組むとともに、金属材料とセラミックスを複合化した電子デバイス用の低線膨張率の高放熱素材、独自の多孔化技術を適用した半導体用途向けの微細多孔質フッ素樹脂膜の開発にも注力しております。

当事業に係る研究開発費は3,420百万円であります。

(4) 環境エネルギー関連事業

超電導や次世代送電網の分野でのネットワーク技術を活用したエネルギーソリューション事業など、新しい分野への進出を図るとともに、蓄電池などエネルギー分野での積極的な開発を推進しております。

超電導分野では、ビスマス系高温超電導線材の特性と量産性を大幅に向上させ、世界各国のケーブルプロジェクトやモータ、マグネット用などに線材を納入するなど、商業ベースでの販売本格化を図りつつあります。2015年4月、従来と比較し、約50~60%の引張り強度の向上を実現した400メガパスカル級の超高強度超電導線材の開発に成功し、販売を開始しました。これにより、核磁気共鳴(NMR)装置などの超高磁場マグネットへの適用範囲が広がりました。

超電導ケーブル交流送電システムでは国立研究開発法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)の「高温超電導ケーブル実証プロジェクト」に参画し、2012年10月から2013年12月まで1年以上にわたり、日本初の系統連系試験を成功裏に完了いたしました。また、2014年6月から本プロジェクトの後継プロジェクトとして「次世代送電システムの安全性・信頼性に係る実証研究」に参画し、実用化への研究開発に取り組んでおり、2017年3月末から約1年の予定で系統接続を再開し、順調に運転しております。

産業応用では超電導マグネットシステムの開発を進めており、2014年7月に小型軽量冷凍機冷凍型マグネットシステム(±6T-Φ70mm)の販売を開始し、磁気特性評価装置への適用、さらに産業界での実用化、用途開拓に注力しているところであります。またビスマス系とは異なる次世代の超電導線材の研究も行っており、結晶配向した金属基板、中間層、超電導層からなる薄膜超電導線の特性向上にも注力しております。

次世代送電網の分野では、自然エネルギーの導入、省エネルギー、電力網の分散管理といった社会ニーズに対応すべく、2011年6月から、当社大阪製作所において、複数の自然エネルギー発電装置と小型レドックスフロー電池(蓄電池)等を直流電力ケーブルで連結したマイクロスマートグリッドシステムの実証試験を実施しております。2012年7月から、当社横浜製作所において、メガワット級の出力・容量を有するレドックスフロー電池と出力100kWの集光型太陽光発電(CPV)から成る大規模蓄発電システムを開発し、実際の工場電力運用の中で、製品化のための実証運転を実施しております。2015年12月からは、北海道電力(株)南早来変電所において、大型蓄電システム(レドックスフロー電池、容量60MWh)の実証試験を実施しております(経済産業省の大型蓄電システム緊急実証事業に北海道電力(株)と共同で応募し、採択されたものです)。2016年11月には、モロッコ王国において出力1MWのCPVプラント運用実証を開始しました。2017年3月には、米国カリフォルニア州において容量8MWhのレドックスフロー電池の実証運転を開始しました(これは当社がNEDOより実証委託を受け、実施するものです)。また、電力需給逼迫時に電力使用量の調整を行うデマンドレスポンス自動化サーバ、宅内の電力使用量を最適化するシステム(HEMS)、電力線通信(PLC)によるメガソーラー監視システム、非常用の小型蓄電池やパワーコンディショナ等の開発にも注力しております。

蓄電池分野では、リチウムイオン電池やキャパシタなどの蓄電デバイスの高性能化に貢献する集電材料として、当社独自の熔融塩めっき技術を用いた金属多孔体「アルミセルメット」を開発しており、量産化に向けた生産技術開発に注力するとともに、ニーズの調査、顧客での評価を進めております。また、EVやHEV等の環境対応車の分野では、固有の高分子材料の合成技術を駆使し、駆動モータ等に適用する高性能平角巻線の開発にも取り組んでおり、モータの高性能化に貢献する薄肉皮膜で高度な電気絶縁性を発揮する次世代平角巻線の開発に注力しております。

住友電設株では、社会や顧客の多様化するニーズに応えるべく、太陽光発電システム用保守監視システム、監視・エネルギー管理等のビル・マネジメントシステム、工場向け総合セキュリティシステム、異常通報システム、超電導冷却システム、蓄電池システム、バーチャルパワープラントなど、最新技術、情報化技術を活用し、省エネ技術、新工法、各種システムの開発に取り組んでおります。

日新電機株では、電力機器分野をはじめ、ビーム・真空応用分野、新エネルギー・環境分野、ライフサイクルエンジニアリング分野にかかわる技術開発・製品開発並びにソリューション開発に注力しております。電力機器分野においては、縮小化及び環境負荷の低減を狙いとした製品開発とともに、太陽光発電をはじめ、多様な分散電源の増加を受けて、電力品質を維持・向上する技術研究や製品開発並びにシステム実証に取り組んでいます。ビーム・真空応用分野においては、新たなコーティング薄膜やその用途拡大に向けた研究開発、半導体製造用イオン注入装置や電子線照射装置などの次世代製品の研究開発に注力しております。また、新エネルギー・環境分野においては、太陽光発電用パワーコンディショナの縮小化及び環境負荷の低減を狙いとした製品開発に注力するとともに、エネルギー管理システム（EMS）関連やIoT関連の技術研究を進めております。

当事業に係る研究開発費は16,022百万円であります。

(5) 産業素材関連事業他

超硬合金、ダイヤモンド、立方晶窒化硼素、コーティング薄膜、特殊鋼線、セラミックスや鉄系焼結部品に関する当社固有の材料技術とプロセス技術を駆使し、切削用工具や超精密加工用工具、各種自動車機構部品・機能部品、家電部品等の開発を進めております。

切削用工具開発においては、今後、市場が伸長していく航空機分野を重点ターゲットとし、革新的な粉末冶金技術、コーティング技術、超高压技術により超硬合金製品、CBN製品の研究開発を進めております。

ダイヤモンドでは、15万気圧、2000℃以上の新しい超高压技術と独自の新プロセスにより合成した、数十nmサイズの超微細粒よりなる高硬度ナノ多結晶ダイヤモンドが従来のダイヤモンドを大きく凌駕する機械的特性を有することを実証し、次世代の高性能精密加工用工具として実用化開発に注力しております。

焼結部品の関連では、ディーゼルエンジン用燃料噴射装置部品など高周波域で優れた磁気特性を持つ圧粉軟磁性材応用製品の開発、EV・HEVなどの自動車の電動化に対応した高性能圧粉軟磁性材料の製品開発に注力しております。

また、切削用工具分野で培った超硬合金技術、コーティング技術を展開すべく、新接合法として注目されている摩擦攪拌接合ツールの開発に取り組み、非切削分野での新市場開拓を目指しております。

当事業に係る研究開発費は7,888百万円であります。

今後の成長を担う新規分野への挑戦としては、農業分野において、当社独自の砂栽培、情報通信技術（ICT）及び環境制御技術を組み合わせることで抜本的な生産性の改善を目指し「農業の工業化」に取り組んでおります。ライフサイエンス分野では当社の既存技術の応用可能性を探索しております。また次世代の電線材料として期待される導電性カーボン単結晶線の長尺化にも独自製法で取り組んでおります。そのほか、材料に強みを持つ当社の特長を活かして、省エネに対応した新たなパワーデバイスであるSiCパワーデバイスを基板から一貫して開発しており、国立研究開発法人 産業技術総合研究所と協力して、つくばにSiC専用6インチ・ラインを立ち上げ、事業化に向けた活動を展開しております。

以上の5分野他の研究開発及びグループ全体の生産、品質などを支える解析技術の分野では、ナノスケールの構造解析や、ポリマーの分子構造解析など、世界トップレベルの分析を行っております。さらに、Spring-8などの放射光施設を利用した最先端の原子レベル解析により、レアメタルのリサイクル技術開発や知的財産権の強化などに寄与しております。なお、放射光利用の拡大を図るため、佐賀県が運営する九州シンクロトロン光研究センターに当社グループ専用のビームラインを建設し、2016年度下期に稼働を開始しました。また、高度な計算機シミュレーションを用いたCAE技術の開発にも注力しており、2016年度には、社内のCAE用並列計算サーバを増強し、処理能力を4倍以上に高めました。加えて、国立研究開発法人 理化学研究所が保有する「京」など、外部のスーパーコンピュータも利用しながら、生産プロセスの改善や各種新製品の設計にCAE技術を活用することで他社との差別化につながる解析技術の開発を推進しております。

そのほか、大阪製作所内の研究本館「Wind Lab」を研究・開発活動の中核とし、さらなる事業の成長を目指します。また、グループ全体として、これらの研究開発成果を早期に確保すべく努めるとともに、企業の社会的責任を自覚し、省エネ、省資源、環境保護に関する研究にも注力してまいります。

7【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づき作成されております。また、連結財務諸表を作成する際には、当連結会計年度末日時点の資産・負債及び当連結会計年度の収益・費用を認識・測定するため、合理的な見積り及び仮定を使用する必要があります。当社グループが採用している会計方針のうち重要なものについては、「第5 経理の状況」の「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」及び「重要な会計方針」に記載しております。

(2) 当連結会計年度の経営成績の分析

海外を中心に自動車用ワイヤーハーネスや光ファイバ・ケーブル、光・電子デバイス等の需要は堅調であった一方、携帯機器用F P Cの需要減少、及び円高や銅価格下落の影響が大きく、この結果、売上高は前連結会計年度比4.0%減の2,814,483百万円、営業利益はグローバルでのコスト低減、新製品の開発・拡販を進め、前連結会計年度比4.9%増の150,503百万円、営業利益率は0.4ポイント上昇の5.3%となりました。営業外収益は、持分法による投資利益の減少により1,992百万円減の44,719百万円、営業外費用は3,179百万円減の21,350百万円となり、経常利益は前連結会計年度比5.0%増の173,872百万円となりました。特別利益では投資有価証券売却益14,432百万円を計上しました。特別損失では、固定資産除却損4,331百万円、事業拠点の再編に伴う事業構造改善費用6,046百万円に加え、和解金10,135百万円を計上し、合計では20,512百万円となりました。この結果、税金等調整前当期純利益は167,792百万円となりました。ここから法人税等41,447百万円及び非支配株主に帰属する当期純利益18,783百万円を差し引いた結果、親会社株主に帰属する当期純利益は、前連結会計年度比18.2%増の107,562百万円となりました。

また、各セグメントの売上高・営業利益に重要な影響を与えている主な要因は次のとおりであります。

自動車関連事業は、ワイヤーハーネスや自動車電装部品、防振ゴムで新規車種への採用拡大などグローバルでの需要捕捉を進め、特に中国をはじめとする海外での販売数量が増加した一方で、円高や銅価格下落の影響を受け、売上高は減収、円高の影響の一方で、グローバル生産拠点でのコスト低減を進め、営業利益は増加しました。情報通信関連事業は、円高の影響の一方で、光ファイバ・ケーブル、光・電子デバイスにおいて中国や米国をはじめとする海外を中心に需要が増加し、データセンター向け光ケーブルの売上による採算改善やコスト低減も加わり、売上高・営業利益ともに増加しました。エレクトロニクス関連事業は、電子ワイヤーで新規需要開拓により販売数量が増加した一方で、携帯機器用F P Cの需要減少及び新製品生産立ち上げ遅れによる販売数量減少や価格競争激化に加え、円高やF P Cの生産量減少に伴う採算悪化の影響もあり、売上高・営業利益ともに減少。環境エネルギー関連事業は、主に銅価格下落の影響のため、売上高は減収、住友電設㈱の海外子会社で過年度の不適切会計の修正処理による損失計上があった一方で、電力ケーブルでのコスト低減、日新電機㈱で高精細・中小型F P D製造用イオン注入装置の需要捕捉及び採算改善が進んだことなどで、営業利益は増加しました。産業素材関連事業他は、円高の影響などにより、売上高は減収、前期は㈱アライドマテリアルでタングステン及びモリブデン相場下落に伴う原材料の時価評価損の計上があったほか、スチールコードで海外でのコスト低減を進め採算が改善したことなどで、営業利益は増加しました。

(3) 資本の財源及び資金の流動性についての分析

当社グループの当連結会計年度における資金の状況は下記のとおりであります。

まず、営業活動によるキャッシュ・フローで209,233百万円の資金を獲得しました。これは、税金等調整前当期純利益167,792百万円と減価償却費130,700百万円との合計、即ち事業の生み出したキャッシュ・フローが298,492百万円あり、これに運転資本の増減などを差し引いた結果であります。

投資活動によるキャッシュ・フローでは、194,829百万円の資金を使用しました。これは、設備投資に伴う有形固定資産の取得による支出175,170百万円などがあったことによるものであります。

なお、営業活動によるキャッシュ・フローから投資活動によるキャッシュ・フローを差し引いたフリー・キャッシュ・フローは、14,404百万円のプラスとなりました。

財務活動によるキャッシュ・フローでは、4,763百万円の資金の減少となりました。これは、社債の発行による収入の一方、自己株式の取得による支出や配当金の支払などによるものであります。

以上により、当連結会計年度末における現金及び現金同等物は、前連結会計年度末より5,947百万円増加

(3.4%)し180,002百万円となりました。また、当連結会計年度末における有利子負債は、前連結会計年度末より53,844百万円増加し510,989百万円となり、有利子負債から現金及び現金同等物を差し引いたネット有利子負債は、47,897百万円増加し330,987百万円となりました。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当社及び連結子会社は、競争力強化のための効率化・合理化投資を行っております。当連結会計年度の設備投資（有形固定資産受入ベースの数値）は183,693百万円となりました。セグメント別の内訳は、次のとおりであります。

- (1) 自動車関連事業
ワイヤーハーネス、防振ゴムの増産及び合理化などで76,946百万円の設備投資を行いました。
- (2) 情報通信関連事業
光・電子デバイス製品、光ファイバ・ケーブルの増産及び合理化などで24,093百万円の設備投資を行いました。
- (3) エレクトロニクス関連事業
フレキシブルプリント回路、電子ワイヤーの増産及び合理化などで34,211百万円の設備投資を行いました。
- (4) 環境エネルギー関連事業
送配電用電線・ケーブル、電力機器の増産及び合理化などで23,963百万円の設備投資を行いました。
- (5) 産業素材関連事業他
超硬工具、焼結部品の増産及び合理化などで24,480百万円の設備投資を行いました。

なお、当連結会計年度において、重要な設備の除却、売却はありません。

2【主要な設備の状況】

当社及び連結子会社における主要な設備は、以下のとおりであります。

(1) 提出会社

(平成29年3月31日現在)

事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	帳簿価額（百万円）					従業員数 (人)
			建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	土地 (面積千㎡)	その他	合計	
大阪製作所 (大阪市此花区)	環境エネルギー関連事業 等	研究施設、導電製品等製造設備	16,479	9,508	1,858 (334)	6,432	34,277	1,626
伊丹製作所 (兵庫県伊丹市)	産業素材関連事業他 等	研究施設	14,623	7,247	539 (359)	2,262	24,671	688
横浜製作所 (横浜市栄区)	情報通信関連事業 等	研究施設、光ファイバ・ケーブル等製造設備	7,951	3,717	2,342 (401)	1,526	15,536	888

(2) 国内子会社

(平成29年3月31日現在)

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額（百万円）					従業員数 (人)
				建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	土地 (面積千㎡)	その他	合計	
住友電装(株)	(三重県四日市市他)	自動車関連事業	ワイヤーハーネス、ハーネス用部品製造設備	11,493	18,038	5,440 (405)	8,660	43,631	6,512
住友理工(株)	本社及び小牧製作所 (愛知県小牧市及び名古屋市中村区)	自動車関連事業	防振ゴム、ホース、樹脂製品等製造設備	10,311	10,536	3,599 (361)	3,956	28,402	2,119
住友電工デバイス・イノベーション(株)	(横浜市栄区他)	情報通信関連事業	光・電子デバイス製品等製造設備	6,848	8,620	3,026 (130)	6,258	24,752	1,177
住友電工焼結合金(株)	(岡山県高梁市他)	産業素材関連事業他	焼結部品製造設備	4,304	8,514	696 (103)	1,878	15,392	848
住友電工ハードメタル(株)	(兵庫県伊丹市他)	産業素材関連事業他	超硬工具等製造設備	1,607	8,186	373 (24)	2,839	13,005	632
北海道住電精密(株)	(北海道空知郡)	産業素材関連事業他	超硬工具等製造設備	3,500	5,870	192 (143)	738	10,300	391
日新電機(株)	本社工場 (京都市右京区)	環境エネルギー関連事業	受変電・調相設備及び制御システム生産設備	4,695	1,322	3,253 (104)	566	9,836	1,122

(3) 在外子会社

(平成29年3月31日現在)

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額 (百万円)					従業員数 (人)
				建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	土地 (面積千㎡)	その他	合計	
スミトモ エレクトリック ワイヤリング システムズ インク	(米国ケンタッキー州他)	自動車関連事業	ワイヤーハーネス、 ハーネス用部品製造 設備	3,536	19,728	103 (281)	5,402	28,769	27,579
エスイーアイ エレクトロニック コンポーネンツ (ベトナム) リミテッド	(ベトナム ハノイ市)	エレクトロニクス関連事業	フレキシブルプリント 回路製造設備	6,839	18,821	— (—)	625	26,285	5,833
スミトモ エレクトリック ボードネットエ スエー	(ドイツ ウォルフスブルグ市 他)	自動車関連事業	ワイヤーハーネス製 造設備	7,984	10,885	300 (188)	3,972	23,141	27,404
スミトモ エレクトリック ワイヤリング システムズ (ヨーロ ッパ) リミテッド	(英国スタッフォードシャー州 他)	自動車関連事業	ワイヤーハーネス、 ハーネス用部品製造 設備	7,601	11,874	559 (369)	—	20,034	21,135
スミリコー テネシー インク	(米国テネシー州)	自動車関連事業	防振ゴム、ホース製 造設備	5,011	6,875	61 (444)	1,885	13,832	1,291
住友電工電子製品 (深 セン) 有限公司	(中国広東省深セン市)	エレクトロニクス関連事業	電子ワイヤー、フレ キシブルプリント回 路製造設備	1,754	8,762	— (—)	2,098	12,614	8,348
エスイーアイ タイ エレクトリック コン ダクター カンパニー リミテッド	(タイ ラヨー ン県)	環境エネルギー 関連事業	導電製品製造設備	3,895	6,521	575 (135)	1,370	12,361	288

- (注) 1. 帳簿価額のうち「その他」は、工具、器具及び備品、建設仮勘定及びリース資産の合計であります。
2. 土地の面積 () には貸与分を含んでおります。
3. 従業員数は就業人員数であります。
4. 各事業所の土地・建物及び構築物には、主に関係会社への貸与分や、各事業所周辺の厚生施設等を含んでおります。
5. 現在休止中の主要な設備はありません。
6. 主要な賃借及びリース設備はありません。

3 【設備の新設、除却等の計画】

(1) 新設・改修

当社及び連結子会社は、多種多様な事業を国内外で行っており、当連結会計年度末時点では設備の新設・改修の計画を個々のプロジェクトごとには決定しておりません。そのため、セグメントごとの数値を開示する方法によっております。

当連結会計年度後1年間の設備投資は、主として受注対応や合理化を目的として180,000百万円を計画しており、セグメントごとの内訳は以下のとおりであります。

セグメントの名称	平成29年3月末 計画金額 (百万円)	計画の主な内容
自動車関連事業	80,000	ワイヤーハーネス、防振ゴム製造設備投資 等
情報通信関連事業	32,000	光ファイバ・ケーブル、光・電子デバイス製品製造設備投資 等
エレクトロニクス 関連事業	13,000	電子ワイヤー、フレキシブルプリント回路、 電子線照射製品製造設備投資 等
環境エネルギー関連事業	27,000	導電製品、送配電用電線・ケーブル・機器、電力機器、 ビーム・真空応用装置、巻線製造設備投資 等
産業素材関連事業他	28,000	特殊金属線、超硬工具、ダイヤ・CBN工具、 焼結部品、タングステン・モリブデン金属製品製造設備投資 等
合計	180,000	

(注) 今後の所要資金については、自己資金及び借入等により充当する予定であります。

(2) 除・売却

経常的な設備更新のための除・売却を除き、重要な設備の除・売却計画はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

①【株式の総数】

種類	発行可能株式総数（株）
普通株式	3,000,000,000
計	3,000,000,000

②【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数(株) (平成29年3月31日)	提出日現在発行数(株) (平成29年6月28日)	上場金融商品取引所名又は登録 認可金融商品取引業協会名	内容
普通株式	793,940,571	793,940,571	東京証券取引所 名古屋証券取引所 ：以上各市場第一部 福岡証券取引所	単元株式数 100株
計	793,940,571	793,940,571	—	—

(2)【新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

(5)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金 増減額 (百万円)	資本金 残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
平成20年4月1日 ～平成21年3月31日（注）	4,439	793,941	2,823	99,737	2,823	177,660

（注）新株予約権の行使（旧商法に基づき発行された転換社債の株式への転換）による増加であります。

(6)【所有者別状況】

（平成29年3月31日現在）

区分	株式の状況（1単元の株式数100株）								単元未満 株式の状況 (株)
	政府及び 地方公共 団体	金融機関	金融商品 取引業者	その他の 法人	外国法人等		個人その 他	計	
					個人以外	個人			
株主数 (人)	—	171	51	578	723	40	49,419	50,982	—
所有株式数 (単元)	—	3,207,673	196,844	360,746	3,180,314	610	990,240	7,936,427	297,871
所有株式数 の割合 (%)	—	40.41	2.48	4.55	40.07	0.01	12.48	100.00	—

（注）自己株式13,853,413株は「個人その他」の欄に138,534単元、「単元未満株式の状況」の欄に13株含まれております。

(7) 【大株主の状況】

(平成29年3月31日現在)

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式総数に 対する所有株式数 の割合 (%)
日本トラスティ・サービス 信託銀行株式会社 (信託口)	東京都中央区晴海一丁目8番11号	61,136	7.70
日本マスタートラスト 信託銀行株式会社 (信託口)	東京都港区浜松町二丁目11番3号	49,536	6.24
日本生命保険相互会社	東京都千代田区丸の内一丁目6番6号	24,703	3.11
住友生命保険相互会社	東京都中央区築地七丁目18番24号	15,556	1.96
日本トラスティ・サービス 信託銀行株式会社 (信託口5)	東京都中央区晴海一丁目8番11号	14,490	1.83
日本トラスティ・サービス 信託銀行株式会社 (信託口9)	東京都中央区晴海一丁目8番11号	14,099	1.78
GOVERNMENT OF NORWAY	BANKPLASSEN 2, 0107 OSLO 1 OSLO 0107 NO	11,851	1.49
STATE STREET BANK WEST CLIENT - TREATY 505234	1776 HERITAGE DRIVE, NORTH QUINCY, MA 02171, U. S. A.	11,475	1.45
日本トラスティ・サービス 信託銀行株式会社 (信託口7)	東京都中央区晴海一丁目8番11号	10,907	1.37
日本トラスティ・サービス 信託銀行株式会社 (信託口1)	東京都中央区晴海一丁目8番11号	10,739	1.35
計	—	224,496	28.28

(注) 上記のほか、当社所有の自己株式が13,853千株 (1.74%) あります。

(8) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

(平成29年3月31日現在)

区分	株式数 (株)	議決権の数 (個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式 (自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式 (その他)	—	—	—
完全議決権株式 (自己株式等)	普通株式 14,152,500	—	単元株式数100株
完全議決権株式 (その他)	普通株式 779,490,200	7,794,902	同上
単元未満株式	普通株式 297,871	—	—
発行済株式総数	793,940,571	—	—
総株主の議決権	—	7,794,902	—

②【自己株式等】

(平成29年3月31日現在)

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数(株)	他人名義 所有株式数(株)	所有株式数の 合計(株)	発行済株式総数に 対する所有株式数 の割合(%)
住友電気工業 株式会社	大阪市中央区北浜 四丁目5番33号	13,853,400	—	13,853,400	1.74
大電株式会社	福岡県久留米市南 二丁目15番1号	1,500	179,200	180,700	0.02
太陽機械商事 株式会社	大阪府東大阪市西石切町 五丁目6番38号	34,600	57,200	91,800	0.01
株式会社 テクノアソシエ	大阪市西区土佐堀 三丁目3番17号	26,600	—	26,600	0.00
計	—	13,916,100	236,400	14,152,500	1.78

(注) 各社の所有株式数のうち、他人名義株式については、住電共栄会(大阪市中央区北浜四丁目5番33号)名義になっております。

- (9)【ストックオプション制度の内容】
該当事項はありません。

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第3号及び会社法第155条第7号に基づく普通株式の取得

- (1)【株主総会決議による取得の状況】
該当事項はありません。

- (2)【取締役会決議による取得の状況】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
取締役会(平成28年5月13日)での決議状況 (取得期間 平成28年5月16日～平成28年9月30日)	16,000,000(上限)	20,000,000,000(上限)
当事業年度前における取得自己株式	—	—
当事業年度における取得自己株式	13,245,400	19,999,882,750
残存決議株式の総額及び価額の総額	2,754,600	117,250
当事業年度の末日現在の未行使割合(%)	17.2	0.0
当期間における取得自己株式	—	—
提出日現在の未行使割合(%)	17.2	0.0

- (3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	1,959	3,084,871
当期間における取得自己株式	368	677,497

(注) 当期間における取得自己株式には、平成29年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取による株式は含まれておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他（単元未満株式買増請求による売渡）	129	204,392	—	—
保有自己株式数	13,853,413	—	13,853,781	—

(注) 1. 当期間における取得自己株式の処理状況には、平成29年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の売渡による株式は含まれておりません。

2. 当期間における保有自己株式数には、平成29年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取及び売渡による株式数の増減は含めておりません。

3 【配当政策】

当社は、株主各位への配当については、安定的な配当の維持を基本に、連結業績、配当性向、内部留保の水準等を総合的に判断し行っていきたいと考えており、また、中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を行うことを基本方針としております。

これらの剰余金の配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会であります。

当事業年度の期末配当金については、上記方針に基づき1株当たり21円とし、さらに当社が平成29年4月に創業120周年を迎えたことを記念する記念配当2円を加え、合計で1株当たり23円とし、年間では40円（普通配当38円、記念配当2円）といたしました。

内部留保については、将来の収益力維持向上を図るため、設備投資や研究開発などの先行投資に活用する所存であります。

当社は、取締役会の決議によって、毎年9月30日の最終の株主名簿に記録された株主又は登録株式質権者に対し、中間配当金として剰余金の配当を行うことができる旨を定款に定めております。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)
平成28年11月1日 取締役会	13,261	17.00
平成29年6月28日 定時株主総会	17,942	23.00

4 【株価の推移】

(1) 【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第143期	第144期	第145期	第146期	第147期
決算年月	平成25年3月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月
最高(円)	1,206	1,757	1,641.5	2,037.0	1,949.0
最低(円)	775	1,083	1,291.0	1,250.0	1,201.0

(注) 最高・最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

(2) 【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	平成28年10月	11月	12月	平成29年1月	2月	3月
最高(円)	1,568.0	1,660.0	1,718.5	1,733.0	1,912.0	1,949.0
最低(円)	1,417.0	1,334.0	1,592.5	1,593.0	1,625.0	1,820.0

(注) 最高・最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

5 【役員 の 状 況】

男性18名 女性1名（役員のうち女性の比率5.3%）

役名及び職名	氏名 (生年月日)	略歴		任期	所有株式数 (株)
(代表取締役) 取締役会長	松本 正義 (昭和19年9月18日生)	昭和42年4月 平成9年6月 平成11年6月 平成15年6月 平成16年6月 平成29年6月	当社入社 取締役 常務取締役 専務取締役 社長 取締役会長（現）	(注) 1	56,700
(代表取締役) 社長	井上 治 (昭和27年8月25日生)	昭和50年4月 平成13年1月 平成15年7月 平成16年6月 平成18年1月 平成18年6月 平成19年6月 平成20年6月 平成21年4月 平成24年6月 平成29年4月 平成29年6月	当社入社 自動車部長 自動車事業本部業務部長 執行役員、自動車事業本部副本部長、同上 住友電装㈱執行役員、支配人 住友電装㈱取締役、常務執行役員、企画本部長、 関係会社本部長 住友電装㈱取締役、専務執行役員 当社常務取締役、自動車事業本部長 取締役、 スミトモ エレクトリック ボードネツェ ゲーエム ペーハー（現 スミトモ エレクトリック ボードネツ ェ エスエー）社長 自動車事業本部副本部長、住友電装㈱取締役、社長 常務執行役員、住友電装㈱取締役 社長（現）	(注) 2	14,410
(代表取締役) 副社長	内桶 文清 (昭和23年10月29日生)	昭和46年4月 平成15年6月 平成15年7月 平成16年6月 平成17年1月 平成17年6月 平成18年6月 平成19年6月 平成19年8月 平成24年6月 平成27年6月 平成28年6月	当社入社 執行役員 同上、情報通信事業本部副本部長 常務執行役員、情報通信ソリューション営業本部長 常務執行役員、情報通信営業本部長 常務取締役、情報通信営業本部長 住友電装㈱取締役、副社長 住友電装㈱取締役、社長 当社自動車事業本部副本部長、住友電装㈱取締役、社長 副社長、情報通信事業本部長 同上、新規事業開発本部長 副社長、新規事業開発本部長（現）	(注) 1	19,850
(代表取締役) 副社長	西田 光男 (昭和23年2月11日生)	昭和47年4月 平成17年6月 平成19年6月 平成21年4月 平成21年6月 平成22年6月 平成26年6月 平成29年4月	当社入社 住友電装㈱取締役、専務執行役員 当社常務執行役員、自動車事業本部副本部長 常務執行役員、自動車事業本部長 常務取締役、自動車事業本部長 専務取締役、自動車事業本部長 副社長、自動車事業本部長 副社長、生産技術本部長、自動車事業本部長、 住友電装㈱会長（現）	(注) 1	22,890

役名及び職名	氏名 (生年月日)	略歴		任期	所有株式数 (株)
(代表取締役) 専務取締役	牛島 望 (昭和32年5月21日生)	昭和55年4月 平成17年6月 平成22年6月 平成23年6月 平成24年6月 平成25年6月 平成29年6月	当社入社 産業素材事業本部業務部長 執行役員、ハードメタル事業部長、 住友電工ハードメタル㈱社長 執行役員、産業素材事業本部副本部長、 ハードメタル事業部長、住友電工ハードメタル㈱社長 常務執行役員、アドバンストマテリアル事業本部長 常務取締役、アドバンストマテリアル事業本部長 専務取締役、アドバンストマテリアル事業本部長 (現)	(注) 1	11,100
(代表取締役) 専務取締役	谷 信 (昭和32年5月28日生)	昭和55年4月 平成16年4月 平成20年6月 平成23年5月 平成23年6月 平成26年6月 平成29年6月	当社入社 経理部長 執行役員、同上 執行役員 同上、スミトモ エレクトリック ワイヤリング システ ムズ インク社長 常務取締役 専務取締役 (現)	(注) 1	10,000
常務取締役	伊藤 順司 (昭和29年10月6日生)	昭和59年4月 平成13年4月 平成19年4月 平成22年4月 平成23年6月 平成25年6月 平成26年6月 平成27年6月 平成28年6月	通商産業省工業技術院電子技術総合研究所 (現 国立研究 開発法人産業技術総合研究所) 入所 独立行政法人産業技術総合研究所 (現 同上) エレクトロ ニクス研究部門長 独立行政法人産業技術総合研究所理事 当社入社、パワーシステム研究所長 執行役員、パワーシステム研究所長 常務執行役員、研究統轄本部副本部長、 パワーシステム研究開発センター長 常務取締役、研究統轄本部副本部長、 パワーシステム研究開発センター長 常務取締役、研究開発本部長、 パワーシステム研究開発センター長、新領域技術研究所長 常務取締役、研究開発本部長、新領域技術研究所長 (現)	(注) 1	14,200
常務取締役	賀須井 良有 (昭和34年5月15日生)	昭和58年4月 平成20年12月 平成24年6月 平成25年6月 平成26年6月 平成27年10月	当社入社 人事総務部長 執行役員、生産技術本部副本部長、同上 常務執行役員、生産技術本部副本部長、人事総務部長 常務取締役、生産技術本部副本部長、人事総務部長 常務取締役、生産技術本部副本部長 (現)	(注) 1	9,700

役名及び職名	氏名 (生年月日)	略歴		任期	所有株式数 (株)
常務取締役	中野 高宏 (昭和31年1月23日生)	昭和55年4月 平成20年6月 平成22年5月 平成23年4月 平成23年6月 平成24年6月 平成25年5月 平成25年6月 平成27年5月 平成27年6月 平成28年6月	当社入社 電線・機材・エネルギー事業本部業務部長、 電力事業部長、産業電線事業部長 執行役員、電線・機材・エネルギー事業本部副本部長、 電力事業部長、産業電線事業部長 同上、エネルギー事業企画部長 執行役員、電線・機材・エネルギー事業本部副本部長、 電力事業部長、産業電線事業部長 執行役員、電線・機材・エネルギー事業本部副本部長 同上、北電RF実証事業推進室長 常務執行役員、電線・機材・エネルギー事業本部長 同上、電力事業部長 常務取締役、電線・機材・エネルギー事業本部長、 電力事業部長 常務取締役、電線・エネルギー事業本部長 (現)	(注) 1	10,100
常務取締役	西村 陽 (昭和33年4月7日生)	昭和59年4月 平成22年4月 平成25年6月 平成27年6月 平成27年7月 平成28年6月	当社入社 光通信事業部長 執行役員、情報通信事業本部副本部長、同上 常務執行役員、情報通信事業本部副本部長、 光通信事業部長 常務執行役員、情報通信事業本部副本部長 常務取締役、情報通信事業本部長 (現)	(注) 1	6,000
常務取締役	羽藤 秀雄 (昭和32年9月3日生)	昭和56年4月 平成19年4月 平成20年4月 平成21年9月 平成23年7月 平成25年6月 平成26年7月 平成28年6月 平成29年6月	通商産業省入省 経済産業省大臣官房審議官 資源エネルギー庁省エネルギー・新エネルギー部長 消費者庁審議官 独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構 (現 国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構) 副理事長 特許庁長官 退官 当社入社、常務執行役員 常務取締役 (現)	(注) 2	5,000
常務取締役	白山 正樹 (昭和36年11月29日生)	昭和60年4月 平成24年6月 平成25年6月 平成26年6月 平成29年6月	当社入社 新規事業開発部長 執行役員、ネットワーク営業本部副本部長、 新規事業マーケティング部長、 新規事業開発本部営業推進部長 常務執行役員、社会システム営業本部長 常務取締役、社会システム営業本部長 (現)	(注) 2	6,000
取締役	平松 一夫 (昭和22年8月10日生)	昭和54年4月 昭和60年4月 平成13年4月 平成14年4月 平成17年10月 平成20年4月 平成20年6月 平成23年10月 平成28年4月	関西学院大学商学部助教 同大学商学部教授 同上、学校法人関西学院理事 同上、関西学院大学学長 同上、日本学術会議第20期会員 関西学院大学商学部教授、学校法人関西学院理事、 日本学術会議第20期 (現第21期) 会員 同上、当社取締役 関西学院大学商学部教授、学校法人関西学院理事、 当社取締役 学校法人関西学院常任理事、当社取締役 (現)	(注) 1	11,100

役名及び職名	氏名 (生年月日)	略歴		任期	所有株式数 (株)
取締役	佐藤 廣士 (昭和20年9月25日生)	昭和45年4月 平成8年6月 平成11年4月 平成11年6月 平成12年6月 平成14年6月 平成15年6月 平成16年6月 平成21年4月 平成25年4月 平成28年4月 平成28年6月	㈱神戸製鋼所入社 同社取締役 同上、執行役員 同社常務執行役員 同社取締役、同上 同社取締役、専務執行役員 同社専務取締役 同社取締役副社長 同社取締役社長 同社取締役会長 同社取締役相談役 同社相談役、当社取締役(現)	(注) 1	500
監査役 (常勤)	小椋 悟 (昭和32年2月23日生)	昭和57年4月 平成16年4月 平成21年6月 平成22年6月 平成24年6月 平成24年7月 平成27年6月	当社入社 法務部長 執行役員、生産技術本部副本部長、同上 同上、競争法コンプライアンス室長 執行役員、競争法コンプライアンス室長、法務部長 執行役員、競争法コンプライアンス室長 監査役(現)	(注) 3	6,800
監査役 (常勤)	林 昭 (昭和33年6月30日生)	昭和56年4月 平成21年7月 平成23年5月 平成28年1月 平成29年6月	当社入社 監査部長 経理部長 支配人 監査役(現)	(注) 4	17,400
監査役	林 幹 (昭和23年6月28日生)	昭和46年8月 昭和61年1月 平成元年7月 平成11年7月 平成14年4月 平成22年6月 平成22年6月	プライスウォーターハウス会計事務所入所 同 日本事務所国際事業開発室長 同 日本事務所パートナー プライスウォーターハウスクーパース税務事務所パート ナー 税理士法人中央青山(現 税理士法人プライスウォーター ハウスクーパース)代表社員 税理士法人プライスウォーターハウスクーパース代表社員 退任 当社監査役(現)	(注) 5	2,600
監査役	渡辺 捷昭 (昭和17年2月13日生)	昭和39年4月 平成4年9月 平成9年6月 平成11年6月 平成13年6月 平成17年6月 平成21年6月 平成23年6月 平成25年6月 平成27年6月	トヨタ自動車工業㈱(現 トヨタ自動車㈱)入社 トヨタ自動車㈱取締役 同社常務取締役 同社専務取締役 同社取締役副社長 同社取締役社長 同社取締役副会長 同社相談役 同上、当社監査役 同社顧問、当社監査役(現)	(注) 6	7,500
監査役	上原 理子 (昭和24年12月24日生)	昭和51年4月 昭和54年4月 昭和57年4月 昭和61年4月 平成元年3月 平成元年5月 平成28年6月	神戸地方裁判所判事補 神戸地方裁判所尼崎支部判事補 大阪地方裁判所判事補 福岡地方裁判所判事 退官 弁護士登録 当社監査役(現)	(注) 7	1,500
計					233,350

- (注)
1. 平成28年6月開催の定時株主総会から2年間
 2. 平成29年6月開催の定時株主総会から1年間
 3. 平成27年6月開催の定時株主総会から4年間
 4. 平成29年6月開催の定時株主総会から2年間
 5. 平成26年6月開催の定時株主総会から4年間
 6. 平成29年6月開催の定時株主総会から4年間
 7. 平成28年6月開催の定時株主総会から4年間
 8. 取締役 平松 一夫、佐藤 廣士は、社外取締役であり、また(株)東京証券取引所等の定めに基づく独立役員であります。
 9. 監査役 林 幹、渡辺 捷昭及び上原 理子は、社外監査役であり、また(株)東京証券取引所等の定めに基づく独立役員であります。
 10. 当社は、執行役員制を導入しており、平成29年6月28日現在の執行役員は、常務執行役員 鳥井 博康、宮田 康弘、柿井 俊昭、林 哲也、清水 和志、中島 成、松下 芳弘、上宮 崇文、漆畑 憲一、小林 正宏の10名、
執行役員 西出 裕、吉岡 剛、徳丸 亀鶴、奈良橋 三郎、四方 洋、岩野 宏、長野 友明、山本 崇晶、柴田 泰行、小林 伸行、清川 浩、緒方 佳幸、関 総一郎、戸川 契、後藤 光宏、早味 宏、佐野 裕一、佐橋 稔之、井上 雅貴の19名、合計29名であります。

6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

① 企業統治の体制

イ. コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

企業統治の体制につきましては、「第2 事業の状況 3. (1) 会社の経営の基本方針」に記載のとおりであります。

ロ. 企業統治の体制の概要と採用の理由

当社では、経営の健全性確保において監査役及び監査役会が一定の役割を果たして来たことから、監査役会設置会社制度を選択しており、取締役会、業務執行体制、監査役及び監査役会が、それぞれの責務を果たすことにより、基本理念の下で持続的な成長と中長期的な企業価値の向上を図ります。

・監査役会設置会社の取締役会は、業務執行の決定機能と監督機能を担いますが、当社では、取締役会が会社の方向性に係る基本的事項を決定する機能と監督機能を適切に果たすことができるよう、投資等の個別案件の審議は重要性の高いものに限定するとともに、中期経営計画やそれを踏まえた年度計画の審議や当該計画の四半期ごとのトレース等に重点を置いた運営を行っています。なお、取締役会において、多角的かつ十分な検討が行われるよう、独立社外取締役を選任しているほか、独立社外監査役にも積極的にご発言いただいています。また、取締役会の監督機能については、独立性・客観性確保のため、独立社外取締役を中心とした独立社外役員の意見を尊重することとしておりますが、一層の実効性確保のため、独立社外取締役を委員長とし、独立社外役員が過半数を占める経営陣幹部・取締役等の指名及び報酬に関する諮問委員会を設置しております。加えて、独立社外取締役につきましては、2016年6月24日の定時株主総会以降は独立社外取締役2名の体制としており、支援体制や独立社外監査役を含む監査役、会計監査人、内部監査部門との連携体制の強化を図ってまいります。

取締役会は、毎月1回定例的に開催するほか、必要に応じて臨時開催しており、取締役会長が議長となり、上記の事項の審議・決定等のほか、内部統制システムの基本方針の決定や同システムの整備・運用状況の監督等を行っています。

・執行体制としては、権限及び責任を明確化し、事業環境の変化に応じた機動的な業務執行体制を確立することを目的として執行役員制並びに事業本部制を導入しており、事業本部に対し、責任を明確化しながら業務執行に係る権限委譲を行うとともに、併せて内部牽制機能を確立するため、社内規程においてコーポレートスタッフ部門を含めたそれぞれの組織権限や実行責任者、適切な業務手続を定めております。

・監査役及び監査役会については、監査役の過半数をさまざまな専門知識や多面的な視点を持つ独立社外監査役とし、これらの監査役と常勤の監査役や監査役専任のスタッフが内部監査部門や会計監査人と連携して適法かつ適正な経営が行われるよう監視する体制としております。

以上の体制により、当社のコーポレート・ガバナンスは十分に機能していると考えておりますが、2015年10月に定めました「コーポレートガバナンス・ガイドライン」に基づき、さらなる体制充実に取り組んでまいります。

② 監査役監査及び内部監査等の状況

当社では、適法かつ適正な経営を確保するために、監査役監査、内部監査及び会計監査人監査の三様監査を受けております。監査役監査については、社外監査役3名を含む合計5名の監査役が監査役スタッフ（監査役室）を活用して取締役の職務執行を監査しております。

各監査役は、監査役会が定めた監査基準・方針・分担に従い、取締役会等重要な会議への出席、取締役、内部監査部門その他の使用人等からの職務状況の聴取、重要な決裁書類の閲覧、主要な事業所等の往査等を実施するとともに、他の監査役から監査状況等の報告を受け、また会計監査人とは適宜情報交換等を行っています。

内部監査については、所管部門として監査部を設置しております。同部は、当社グループ会社を含めた事業所往査等の監査を通じて適正かつ効率的な業務実施のための問題点の調査や改善提案を行っており、また監査役及び会計監査人とも適宜連携を取って監査を実施しております。

会計監査人による会計監査及び内部統制監査は有限責任 あずさ監査法人が実施しており、業務執行社員は谷尋史氏、前田俊之氏、山田徹雄氏、監査業務に係る補助者は公認会計士16名、その他18名です。

なお、常勤監査役林昭氏は、当社の経理・財務部門内における長年の経験があり、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しております。

また、社外監査役林幹氏は公認会計士及び税理士としての資格を有しており、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しております。

③ 社外取締役及び社外監査役

当社は、社外の視点を入れて取締役会の監督機能を一層強化し、経営の透明性や客観性を高めていくために、社外取締役2名を選任しております。また、適法かつ適正な経営が行われるよう監視する体制を強化するため、監査役の過半数を占めるように、さまざまな専門知識や多面的な視点を持つ社外監査役3名を選任しております。

社外取締役及び社外監査役が、現在業務執行者であるか、又は過去10年以内において業務執行者であった他の会社等と当社との間に、2016年度以降に生じた取引関係等は次のとおりですが、いずれにおいてもその職務の遂行に影響を及ぼすような特別な利害関係はありません。

- ・社外取締役平松一夫氏は、学校法人関西学院の常任理事であります。当社は同学校法人に対し、研究部門より研究を委託することがあり、また、他の大学に対するものと水準の寄付を行うことがあります。いずれも、その金額、性質等に照らして、平松一夫氏の独立性に影響を与えるものではありません。
- ・社外取締役佐藤廣士氏は、2016年4月1日まで、株式会社神戸製鋼所の取締役会長でありました。当社と同社との間には、製品の購入・販売に関する取引関係がありますが、その取引の規模等に照らして、佐藤廣士氏の独立性に影響を与えるものではありません。
- ・社外監査役林幹氏は、2010年6月24日まで、税理士法人プライスウォーターハウスクーパースの代表社員でありました。当社と同税理士法人の間には、顧問契約や定期的な取引はありません。当社は同税理士法人に対し、時には税務に関する調査・指導に係る業務を委託することがありますが、その取引の頻度及び規模等に照らして、林幹氏の独立性に影響を与えるものではありません。
- ・社外監査役渡辺捷昭氏は、2011年6月17日まで、トヨタ自動車株式会社の取締役副会長でありました。当社と同社との間には、製品販売に関する取引関係がありますが、その取引の規模等に照らして、渡辺捷昭氏の独立性に影響を与えるものではありません。
- ・社外監査役上原理子氏と当社との間に、取引関係等はありません。

当社は、社外役員にその役割を十分に果たしていただくためには、当社からの独立性が必要であると考えております。そのため、当社は独立社外取締役・監査役の独立性判断基準を制定しており、当社との利害関係の有無を慎重に調査・確認のうえ、候補者を選定しております。なお、当該基準は当社ウェブサイト

(<http://www.sei.co.jp/company/governance.html>)に掲載しております。現在の社外役員は、全員が㈱東京証券取引所等の定める独立性に関する判断基準の要件に照らしても問題はなく、社外取締役又は社外監査役としての職務を適切に遂行していただけるものと考えており、一般株主との間で利益相反の生じるおそれはないものと判断し、社外役員全員について、同取引所等が規定する独立役員として指定しております。なお、社外取締役及び社外監査役による当社株式の保有状況は「5. 役員状況」の「所有株式数」欄に記載のとおりであります。

社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係については、①企業統治の体制、②監査役監査及び内部監査等の状況に記載のとおりであります。

④ 内部統制システムに関する基本的な考え方

イ. 取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

取締役会の議事録を作成し保存するとともに、情報管理規程、文書規程及び書類保存規程に定めるところに従い、起案決裁書等、取締役の職務の執行及び決裁に係る情報について記録し、適切に管理するものとする。

ロ. 損失の危険の管理に関する規程その他の体制

災害、品質、安全、環境、与信及び貿易管理などのグループ横断的な主要リスクについては、各リスクを所管するコーポレートスタッフ部門や当該部門担当の取締役等（「役付取締役、役付執行役員」をいう。以下同じ）が主催する委員会がグループ内に展開する対応策や事故事例・防止策に従い、各部門が所管事業の遂行に伴うリスクを再評価のうえリスク管理を行うものとする。

なお、サイバー攻撃の増加・巧妙化に対応したサイバーセキュリティ、グローバルな事業展開に伴い重要性が増している贈賄防止、機密情報・個人情報管理や法務、労務、税務等の喫緊の課題については、リスク管理委員会主導の下、関係部門が連携して体制の整備や取組みの強化を図ることとしている。

また、部門に固有のリスクについては、専門的知見を有するコーポレートスタッフ部門や外部専門家の支援を適宜受けながらリスクの軽減等を行う。

これらの活動は、リスク管理委員会が、リスク管理規程に従い統轄し、監査役、内部監査部門及び各リスクを所管するコーポレートスタッフ部門とも連携しながらモニタリングする。

さらに、重大なリスクが顕在化し緊急の対応が必要な場合には、リスク管理実務委員会が危機レベルの判定や対策本部の設置等を行う。

ハ. 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

取締役等や基幹職の職務執行が効率的且つ適正に行われるよう、職制及び業務規程において担当部門、職務権限及び各組織の所管業務を定める。

また、執行役員制及び事業本部制を採用し、各事業本部、営業本部及び研究開発本部が、本部長のもと、環境変化や顧客ニーズに応じた機動的な事業運営を行う体制とする。

なお、各本部の業績等については、中期計画及びその達成に向けた年度計画を策定し、経理部門及び経理担当役員が月次単位で達成状況を把握・分析のうえ、経営会議・取締役会に報告して所要の対策について検討する体制とする。

TV会議やコンピュータ・情報通信システムの活用を推進し、経営情報の効率的な収集・分析及び活用・共有化を図る。

ニ. 取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

住友の事業精神並びに経営理念を敷衍した企業行動憲章や具体的な禁止事項等を示したコンプライアンス行動指針の浸透に努めるほか、トップの発言・行動を通じ、法令遵守、企業倫理の維持が経営の根幹をなすものであることを徹底する。

社長を委員長とするコンプライアンス委員会において、グループ横断的なコンプライアンス・リスクの把握・分析、コンプライアンス行動指針の作成・見直し、研修の企画・実施、違反事例に係わる原因の究明や再発防止策の立案並びにそれらのグループ内への周知徹底及びコンプライアンス推進活動のモニタリング等を行う。

一方、各部門においては、部門特有のリスクを含め、コンプライアンス・リスクを把握、分析のうえ発生防止策を講じることとしており、コンプライアンス委員会、法務部、監査役及び内部監査部門は連携して、そのモニタリングを行う。

なお、国内外の競争法の遵守については、グループ内における疑わしい行為を含むカルテル・談合行為根絶のため、競争法に関する教育を継続的に実施するとともに、コンプライアンス委員会の下で、競争法コンプライアンス室が、各本部の専任組織もしくは競争法コンプライアンス推進責任者と連携して、競争法コンプライアンス規程の運用及び遵守状況のモニタリングを行い、また、その他の競争法コンプライアンスに関する施策を企画・実行する。

また、コンプライアンス委員会は社内及び社外に設置した相談・申告窓口寄せられた情報につき、適切に状況の把握を行い、必要な対策をとるものとする。

ホ. 財務報告の適正性を確保するための体制

社長を委員長とする財務報告内部統制委員会を設置するとともに、コーポレートスタッフ部門に推進組織を設け、それらの方針・指導・支援のもと、各部門・子会社において、金融商品取引法及び金融庁が定める評価・監査の基準・実施基準に沿った、内部統制システムの整備及び適切な運用を進め、財務報告の適正性を確保するための体制の一層の強化を図る。監査部は、各事業年度毎にグループ全体の内部統制システムの有効性についての評価を行い、その結果をもとに金融庁に提出する内部統制報告書を取りまとめ、財務報告内部統制委員会及び取締役会の承認を得るものとする。

ヘ. 当社及び子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制

住友の事業精神並びに経営理念を敷衍した企業行動憲章について、グループ会社にも浸透を図り、事業運営上、尊重・遵守していくべき事項の共有化に努める。

関係会社管理規程に基づき、当社経営会議、取締役会で報告・付議すべき決定事項・発生事実やリスク管理、コンプライアンス等に関する一定の事項について子会社から報告を受け、又は必要により当社と協議を行うものとする。

加えて、各子会社の取締役ないし監査役に、所管本部等の関係者や経理部門の基幹職等が就任し、各社の経営状況の把握に努めるほか、グループ監査役会や当社人事部門、総務部門、経理部門等のコーポレートスタッフ部門による子会社関係部門との交流を通じて、リスク管理やコンプライアンスの体制等に関する情報交換を行うものとする。なお、リスク管理やコンプライアンスに関する主な活動は、当社本体のみならず、上場会社及びその子会社を除く国内外の子会社を対象に行っている。

グループ横断的な主要リスクについては、当社の担当部門等がグループ内に展開する対応策や事故事例・防止策に従い、各子会社が自社事業の遂行に伴うリスクを再評価のうえリスク管理を行うほか、各社固有のリスクについても、当社の支援を受け、リスクの軽減等を行う。

コンプライアンスに関しても、当社のコンプライアンス委員会や法務部門等が、グループ内に展開する主要なコンプライアンス・リスク及び発生防止策に従い、各子会社において、自社特有のリスクを含め、対策を講じる体制としている。なお、内部通報のための相談・申告窓口は、各子会社に対し、独自の社内窓口の設置について指導するとともに、国内・海外それぞれにおいて、グループ共通の社外窓口を設ける。

各子会社の事業は、事業本部制の下で機動的に運営される体制となっている。各子会社の事業計画は、各本部の中期計画及び年度計画の一環として策定され、各本部の業績が月次単位で経営会議、取締役会に報告されて、所要の対策等が検討される体制としている。また、子会社におけるコンピュータ、情報通信システム等の活用についても、グループ共通の基盤の利用を推進している。

- ト. 監査役の職務を補助すべき使用人に関する事項、当該使用人の取締役からの独立性及び当該使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項
専ら監査役の業務を補助すべき部門として監査役室を設置し、専任の者を含む使用人（以下「監査役スタッフ」という）を配置するものとする。監査役スタッフの人事異動、人事評価に際しては、あらかじめ監査役会に相談して、意見を求めることとし、監査役スタッフは、監査役の指揮命令に従うものとする。
- チ. 当社の取締役及び使用人、子会社の取締役及び使用人又はこれらの者から報告を受けた者が当社監査役に報告をするための体制その他の当社監査役への報告に関する体制
監査役は、当社のグループ全体の運営を所管する経営会議、リスク管理委員会、コンプライアンス委員会等の重要な各種会議に陪席することとする。その他、グループ内の突発の法令・定款違反行為や重要な業務執行、内部統制システムの変更（軽微なものを除く）等について、取締役、部門長又は子会社社長等から適宜監査役に報告する体制とする。
- リ. 監査役へ報告をした者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制
内部通報窓口制度に関する規程において、監査役スタッフに情報提供を行ったことを理由として解雇その他の不利益な取扱いを行わない旨を規定するなど、当社及び各子会社は、監査役に前項チ.の報告をしたことを理由として、当該報告をした者に対して不利な取扱いを行わない。
- ヌ. 監査役職務の執行について生ずる費用又は債務の処理に係る方針に関する事項
監査役職務の執行について生ずる費用又は債務の処理のために、毎年度、監査役承認のもと必要な予算を設定し、監査役から前払又は支出した費用等の償還、負担した債務の弁済の請求があった場合には、速やかに対応するものとする。
また、監査役がその職務の執行に関連して弁護士、公認会計士等の外部専門家に相談する場合の費用は、会社が負担することとする。
- ル. その他監査役監査の実効的に行われることを確保するための体制
監査役が取締役及び部門長からヒアリングを行う機会を適宜確保するとともに、取締役会長、社長及びコーポレートスタッフ部門担当役員等と監査役との意見交換会を定期的開催する。
- ⑤ 責任限定契約の内容の概要
当社は、定款において、社外取締役及び社外監査役の責任限定契約に関する規定を設けております。当該定款の規定に基づいて、当社が社外取締役及び社外監査役の全員との間で締結している責任限定契約の内容の概要は次のとおりであります。
社外取締役又は社外監査役は、本契約締結後、会社法第423条第1項の責任について、その職務を行うにつき善意でありかつ重大な過失がなかったときは、金10百万円又は会社法第425条第1項に定める最低責任限度額のいずれか高い額を限度として損害賠償責任を負担するものとする。
- ⑥ 取締役の員数
当社は、取締役の員数を3名以上とする旨定款に定めております。
- ⑦ 取締役の選任の決議要件
当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨定款に定めております。また、取締役の選任決議は、累積投票によらないものとする旨も定款に定めております。
- ⑧ 株主総会決議事項を取締役会で決議できるとした事項
イ. 自己の株式の取得
当社は、企業環境の変化に応じた機動的な経営を可能にするため、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって市場取引等により自己の株式を取得することができる旨定款に定めている。
- ロ. 中間配当
当社は、株主への機動的な利益還元の実施を可能にするため、会社法第454条第5項の規定により、取締役会の決議によって、毎年9月30日の最終の株主名簿に記録された株主又は登録株式質権者に対し、中間配当金として剰余金の配当を行うことができる旨定款に定めている。

⑨ 株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上に当たる多数をもって行う旨定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

⑩ 役員報酬等

イ. 役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (千円)	報酬等の種類別の総額 (千円)				対象となる 役員の員数 (人)
		基本報酬	ストック・ オプション	賞与	退職慰労金	
取締役 (社外取締役を除く)	814,390	564,390	—	250,000	—	14
監査役 (社外監査役を除く)	72,120	72,120	—	—	—	2
社外役員	80,010	80,010	—	—	—	6

ロ. 報酬等の総額が1億円以上である者の報酬等の総額等

氏名	役員区分	会社区分	報酬等の種類別の総額 (千円)				報酬等 の総額 (千円)
			基本報酬	ストック・ オプション	賞与	退職慰労金	
松本 正義	社長	提出会社	119,190	—	53,000	—	172,190

(注) 松本正義氏は、平成29年6月28日付にて取締役会長に就任しております。

ハ. 使用人兼務役員の使用人分給与のうち重要なもの

該当事項はありません。

ニ. 役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針の内容及び決定方法

取締役の報酬については、職位毎に当社の取締役にもふさわしい報酬水準を設定し、そのうえで、各人の報酬は、役割や責任度合い並びに会社業績への貢献度に基づいて決定いたします。なお、株主総会において承認決議をいただいた報酬額の枠内で決定いたします。また、取締役の賞与については、総額は、毎期の会社業績、特に利益指標、配当水準等をもとに株主総会の決議をいただいたうえで決定いたします。各人への配分は、中長期的な観点も踏まえ、職位や責任度合い、主要目標の達成度、毎期の会社業績への貢献度に基づいて決定いたします。取締役の報酬及び賞与は、報酬諮問委員会にて客観的視点から審議を行い、その答申をもとに取締役会の決議によって決定いたします。

監査役の報酬については、株主総会において承認決議をいただいた報酬額の枠内で、監査役の協議により決定いたします。

なお、役員の報酬決定に際しては、事業内容、規模等の類似する企業を対象とした、役員報酬に関する第三者の調査を活用することにより、報酬、賞与及び年俸水準の客観性を確保しております。

⑪ 株式の保有状況

イ. 投資株式のうち保有目的が純投資目的以外の目的であるものの銘柄数及び貸借対照表計上額の合計額

213銘柄 65,191百万円

ロ. 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的
前事業年度

特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
住友不動産(株)	2,201,500	7,252	企業間取引の維持・強化のため
(株)明電舎	13,156,926	6,750	企業間取引の維持・強化のため
本田技研工業(株)	2,002,000	6,178	企業間取引の維持・強化のため
ダイキン工業(株)	300,000	2,524	企業間取引の維持・強化のため
住友金属鉱山(株)	1,462,500	1,634	企業間取引の維持・強化のため
東海旅客鉄道(株)	82,000	1,632	企業間取引の維持・強化のため
マツダ(株)	928,400	1,621	企業間取引の維持・強化のため
(株)三井住友フィナンシャルグループ	473,400	1,615	企業間取引の維持・強化のため
住友商事(株)	1,356,500	1,517	企業間取引の維持・強化のため
阪急阪神ホールディングス(株)	2,063,562	1,482	企業間取引の維持・強化のため
近鉄グループホールディングス(株)	3,214,399	1,466	企業間取引の維持・強化のため
(株)デンソー	309,000	1,398	企業間取引の維持・強化のため
新日鐵住金(株) (注) 1	604,000	1,306	企業間取引の維持・強化のため
(株)エヌ・ティ・ティ・ドコモ	500,000	1,276	企業間取引の維持・強化のため
日本電信電話(株)	224,400	1,088	企業間取引の維持・強化のため
日本リーテック(株)	1,056,000	894	企業間取引の維持・強化のため
東北電力(株)	611,151	887	企業間取引の維持・強化のため
日本電気(株)	3,066,000	868	企業間取引の維持・強化のため
日本碍子(株)	403,000	838	企業間取引の維持・強化のため
(株)きんでん	604,303	834	企業間取引の維持・強化のため

みなし保有株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
トヨタ自動車(株)	6,802,000	40,486	議決権行使の指図
住友商事(株)	9,256,500	10,353	議決権行使の指図
コムシスホールディングス(株)	5,166,411	8,979	議決権行使の指図
KDDI(株)	2,724,600	8,190	議決権行使の指図
(株)協和エクシオ	5,766,900	7,209	議決権行使の指図
日本電気(株)	22,880,000	6,475	議決権行使の指図
三井住友トラスト・ホールディングス(株)	17,986,860	5,928	議決権行使の指図
住友金属鉱山(株)	3,651,500	4,081	議決権行使の指図
(株)三井住友フィナンシャルグループ	1,180,000	4,026	議決権行使の指図
MS&ADインシュアランスグループ ホールディングス(株)	896,636	2,812	議決権行使の指図

(注) 1. 新日鐵住金(株)は、平成27年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を実施しております。

2. 貸借対照表計上額の上位銘柄を選定する段階で、特定投資株式とみなし保有株式を合算していません。

当事業年度
特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
本田技研工業(株)	2,002,000	6,709	企業間取引の維持・強化のため
住友不動産(株)	1,981,500	5,719	企業間取引の維持・強化のため
(株)明電舎	13,156,926	5,197	企業間取引の維持・強化のため
ダイキン工業(株)	300,000	3,356	企業間取引の維持・強化のため
住友金属鉱山(株)	1,462,500	2,316	企業間取引の維持・強化のため
住友商事(株)	1,356,500	2,031	企業間取引の維持・強化のため
(株)三井住友フィナンシャルグループ	473,400	1,915	企業間取引の維持・強化のため
新日鐵住金(株)	604,000	1,549	企業間取引の維持・強化のため
(株)デンソー	309,000	1,513	企業間取引の維持・強化のため
阪急阪神ホールディングス(株) (注) 1	412,712	1,494	企業間取引の維持・強化のため
マツダ(株)	928,400	1,488	企業間取引の維持・強化のため
東海旅客鉄道(株)	82,000	1,487	企業間取引の維持・強化のため
(株)エヌ・ティ・ティ・ドコモ	500,000	1,296	企業間取引の維持・強化のため
近鉄グループホールディングス(株)	3,214,399	1,289	企業間取引の維持・強化のため
日本リーテック(株)	1,056,000	1,260	企業間取引の維持・強化のため
三菱電機(株)	680,000	1,086	企業間取引の維持・強化のため
日本電信電話(株)	224,400	1,066	企業間取引の維持・強化のため
(株)ダイヘン	1,413,000	1,023	企業間取引の維持・強化のため
日本碍子(株)	403,000	1,016	企業間取引の維持・強化のため
(株)きんでん	604,303	939	企業間取引の維持・強化のため

みなし保有株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
トヨタ自動車(株)	6,802,000	41,098	議決権行使の指図
住友商事(株)	9,256,500	13,862	議決権行使の指図
コムシスホールディングス(株)	5,166,411	10,276	議決権行使の指図
(株)協和エクシオ	5,766,900	9,290	議決権行使の指図
KDDI(株)	2,724,600	7,961	議決権行使の指図
三井住友トラスト・ホールディングス(株) (注) 2	1,798,686	6,943	議決権行使の指図
日本電気(株)	22,880,000	6,132	議決権行使の指図
住友金属鉱山(株)	3,651,500	5,782	議決権行使の指図
(株)三井住友フィナンシャルグループ	1,180,000	4,773	議決権行使の指図
MS&ADインシュアランスグループ ホールディングス(株)	896,636	3,174	議決権行使の指図

(注) 1. 阪急阪神ホールディングス(株)は、平成28年8月1日付で普通株式5株につき1株の割合で株式併合を実施しております。

2. 三井住友トラスト・ホールディングス(株)は、平成28年10月1日付で普通株式10株につき1株の割合で株式併合を実施しております。

3. 貸借対照表計上額の上位銘柄を選定する段階で、特定投資株式とみなし保有株式を合算しておりません。

ハ. 保有目的が純投資目的である投資株式の前事業年度及び当事業年度における貸借対照表計上額の合計額並びに当事業年度における受取配当金、売却損益及び評価損益の合計額該当ありません。

(2) 【監査報酬の内容等】

① 【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）
提出会社	156	8	157	14
連結子会社	447	133	505	78
計	603	141	662	92

② 【その他重要な報酬の内容】

(前連結会計年度)

海外連結子会社の主な監査証明業務及び税務申告業務に関するアドバイザリー業務などの非監査証明業務の委託先である当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属する監査人に対して報酬を支払っております。

(当連結会計年度)

海外連結子会社の主な監査証明業務及び税務申告業務に関するアドバイザリー業務などの非監査証明業務の委託先である当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属する監査人に対して報酬を支払っております。

③ 【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

(前連結会計年度)

当社が監査公認会計士等に対して報酬を支払っている非監査業務の内容は、内部統制関連の調査・助言業務等であります。

(当連結会計年度)

当社が監査公認会計士等に対して報酬を支払っている非監査業務の内容は、子会社の財務調査に関する指導・助言等であります。

④ 【監査報酬の決定方針】

監査公認会計士等に対する報酬の額の決定に関する方針について、当社では特段の定めはありませんが、業務執行部門において監査日数や当社の規模・業務の特性等の要素を勘案して適切に報酬の額を決定したうえで、会社法第399条に基づく監査役会の同意を得ております。

第5【経理の状況】

1. 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号。以下「連結財務諸表規則」という。）に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。）に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（平成28年4月1日から平成29年3月31日まで）の連結財務諸表及び事業年度（平成28年4月1日から平成29年3月31日まで）の財務諸表について、有限責任 あずさ監査法人による監査を受けております。

3. 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、会計基準等の変更についての的確に対応することができる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、同法人などが主催しているセミナー等に参加しております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	174,686	180,034
受取手形及び売掛金	622,944	648,411
有価証券	57	792
たな卸資産	※1 422,976	※1 449,070
繰延税金資産	48,764	49,734
その他	91,359	101,245
貸倒引当金	△3,590	△2,733
流動資産合計	1,357,196	1,426,553
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	620,088	644,054
減価償却累計額	△359,072	△377,354
建物及び構築物（純額）	261,016	266,700
機械装置及び運搬具	1,233,137	1,314,297
減価償却累計額	△900,749	△945,475
機械装置及び運搬具（純額）	332,388	368,822
工具、器具及び備品	273,569	285,938
減価償却累計額	△225,549	△235,295
工具、器具及び備品（純額）	48,020	50,643
土地	87,512	87,904
建設仮勘定	48,505	46,813
その他	4,310	4,086
減価償却累計額	△1,631	△1,783
その他（純額）	2,679	2,303
有形固定資産合計	※3 780,120	※3 823,185
無形固定資産		
のれん	8,887	10,957
その他	42,846	43,359
無形固定資産合計	51,733	54,316
投資その他の資産		
投資有価証券	※2 420,759	※2 437,332
退職給付に係る資産	75,728	98,739
繰延税金資産	17,829	19,680
その他	40,911	46,219
貸倒引当金	△1,428	△2,440
投資その他の資産合計	553,799	599,530
固定資産合計	1,385,652	1,477,031
資産合計	2,742,848	2,903,584

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	349,360	378,110
短期借入金	※3 162,213	※3 179,584
1年内償還予定の社債	10,610	15,000
未払法人税等	19,279	17,797
役員賞与引当金	919	848
完成工事補償引当金	475	706
受注損失引当金	4,247	4,064
その他	224,070	228,066
流動負債合計	771,173	824,175
固定負債		
社債	25,000	60,000
長期借入金	※3 256,239	※3 253,862
繰延税金負債	59,228	65,988
役員退職慰労引当金	1,269	1,041
退職給付に係る負債	51,562	54,553
その他	17,088	17,463
固定負債合計	410,386	452,907
負債合計	1,181,559	1,277,082
純資産の部		
株主資本		
資本金	99,737	99,737
資本剰余金	171,314	170,849
利益剰余金	981,413	1,061,374
自己株式	△677	△20,736
株主資本合計	1,251,787	1,311,224
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	74,629	76,784
繰延ヘッジ損益	2,134	227
為替換算調整勘定	27,680	6,547
退職給付に係る調整累計額	4,309	20,644
その他の包括利益累計額合計	108,752	104,202
非支配株主持分	200,750	211,076
純資産合計	1,561,289	1,626,502
負債純資産合計	2,742,848	2,903,584

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
売上高	2,933,089	2,814,483
売上原価	※2, 3 2,397,166	※2, 3 2,284,190
売上総利益	535,923	530,293
販売費及び一般管理費	※1, 2 392,447	※1, 2 379,790
営業利益	143,476	150,503
営業外収益		
受取利息	1,223	1,154
受取配当金	4,048	3,679
持分法による投資利益	29,645	28,200
その他	11,795	11,686
営業外収益合計	46,711	44,719
営業外費用		
支払利息	5,271	4,831
為替差損	3,907	—
その他	15,351	16,519
営業外費用合計	24,529	21,350
経常利益	165,658	173,872
特別利益		
投資有価証券売却益	32,186	14,432
特別利益合計	32,186	14,432
特別損失		
固定資産除却損	※4 3,275	※4 4,331
事業構造改善費用	※5 6,046	※5 6,046
和解金	20,661	10,135
減損損失	※6 12,479	※6 —
特別輸送費	※7 524	—
特別損失合計	42,985	20,512
税金等調整前当期純利益	154,859	167,792
法人税、住民税及び事業税	50,002	39,068
法人税等調整額	△176	2,379
法人税等合計	49,826	41,447
当期純利益	105,033	126,345
非支配株主に帰属する当期純利益	14,032	18,783
親会社株主に帰属する当期純利益	91,001	107,562

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
当期純利益	105,033	126,345
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	△54,798	4,501
繰延ヘッジ損益	3,193	△2,015
為替換算調整勘定	△53,685	△15,283
退職給付に係る調整額	△27,300	18,095
持分法適用会社に対する持分相当額	△13,394	△11,304
その他の包括利益合計	※ △145,984	※ △6,006
包括利益	△40,951	120,339
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	△38,300	102,824
非支配株主に係る包括利益	△2,651	17,515

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	99,737	171,020	920,850	△667	1,190,940
当期変動額					
剰余金の配当			△27,767		△27,767
親会社株主に帰属する 当期純利益			91,001		91,001
自己株式の取得				△10	△10
自己株式の処分		0		0	0
連結範囲の変動			△663		△663
持分法の適用範囲の変動			602		602
非支配株主との取引に係る 親会社の持分変動		294			294
その他			※ △2,610		△2,610
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）					
当期変動額合計	－	294	60,563	△10	60,847
当期末残高	99,737	171,314	981,413	△677	1,251,787

	その他の包括利益累計額					非支配株主 持分	純資産合計
	その他有価証 券評価差額金	繰延ヘッジ 損益	為替換算調整 勘定	退職給付に係 る調整累計額	その他の包括 利益累計額合計		
当期首残高	127,416	△838	88,444	25,224	240,246	215,727	1,646,913
当期変動額							
剰余金の配当							△27,767
親会社株主に帰属する 当期純利益							91,001
自己株式の取得							△10
自己株式の処分							0
連結範囲の変動							△663
持分法の適用範囲の変動							602
非支配株主との取引に係る 親会社の持分変動							294
その他							△2,610
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	△52,787	2,972	△60,764	△20,915	△131,494	△14,977	△146,471
当期変動額合計	△52,787	2,972	△60,764	△20,915	△131,494	△14,977	△85,624
当期末残高	74,629	2,134	27,680	4,309	108,752	200,750	1,561,289

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	99,737	171,314	981,413	△677	1,251,787
当期変動額					
剰余金の配当			△27,541		△27,541
親会社株主に帰属する 当期純利益			107,562		107,562
自己株式の取得				△20,059	△20,059
自己株式の処分		0		0	0
連結範囲の変動			△60		△60
持分法の適用範囲の変動					—
非支配株主との取引に係る 親会社の持分変動		△465			△465
その他					—
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	△465	79,961	△20,059	59,437
当期末残高	99,737	170,849	1,061,374	△20,736	1,311,224

	その他の包括利益累計額					非支配株主 持分	純資産合計
	その他有価証 券評価差額金	繰延ヘッジ 損益	為替換算調整 勘定	退職給付に係 る調整累計額	その他の包括 利益累計額合計		
当期首残高	74,629	2,134	27,680	4,309	108,752	200,750	1,561,289
当期変動額							
剰余金の配当							△27,541
親会社株主に帰属する 当期純利益							107,562
自己株式の取得							△20,059
自己株式の処分							0
連結範囲の変動							△60
持分法の適用範囲の変動							—
非支配株主との取引に係る 親会社の持分変動							△465
その他							—
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	2,155	△1,907	△21,133	16,335	△4,550	10,326	5,776
当期変動額合計	2,155	△1,907	△21,133	16,335	△4,550	10,326	65,213
当期末残高	76,784	227	6,547	20,644	104,202	211,076	1,626,502

④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	154,859	167,792
減価償却費	131,117	130,700
減損損失	15,405	2,391
のれん償却額	3,844	1,806
受取利息及び受取配当金	△5,271	△4,833
支払利息	5,271	4,831
持分法による投資損益 (△は益)	△29,645	△28,200
固定資産売却損益 (△は益)	△1,966	△1,910
投資有価証券売却損益 (△は益)	△32,170	△14,403
固定資産除却損	3,644	6,208
投資有価証券評価損益 (△は益)	843	1,871
和解金	20,661	10,135
売上債権の増減額 (△は増加)	2,714	△29,405
たな卸資産の増減額 (△は増加)	7,952	△29,509
仕入債務の増減額 (△は減少)	△8,157	29,848
退職給付に係る資産負債の増減額	2,590	1,406
その他	15,852	10,947
小計	287,543	259,675
利息及び配当金の受取額	14,386	10,903
利息の支払額	△5,675	△4,884
和解金の支払額	△17,634	△21,006
法人税等の支払額	△37,841	△35,455
営業活動によるキャッシュ・フロー	240,779	209,233
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有形固定資産の取得による支出	△160,309	△175,170
有形固定資産の売却による収入	5,823	4,852
投資有価証券の取得による支出	△4,159	△13,507
投資有価証券の売却による収入	56,472	19,984
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による支出	—	△6,205
その他	△15,214	△24,783
投資活動によるキャッシュ・フロー	△117,387	△194,829

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額 (△は減少)	△64,008	33,200
長期借入れによる収入	18,756	32,279
長期借入金の返済による支出	△21,495	△51,685
社債の発行による収入	—	50,000
社債の償還による支出	△10,620	△10,610
自己株式の取得による支出	△6	△20,002
配当金の支払額	△27,767	△27,541
非支配株主への配当金の支払額	△10,023	△9,815
連結の範囲の変更を伴わない子会社株式の取得による支出	△908	△1,230
その他	159	641
財務活動によるキャッシュ・フロー	△115,912	△4,763
現金及び現金同等物に係る換算差額	△10,554	△3,544
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	△3,074	6,097
現金及び現金同等物の期首残高	177,107	174,055
連結子会社の決算期変更による現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	△8	—
新規連結に伴う現金及び現金同等物の増加額	30	545
連結除外に伴う現金及び現金同等物の減少額	—	△695
現金及び現金同等物の期末残高	※ 174,055	※ 180,002

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結の範囲に含めた子会社の数

357社

当連結会計年度より、株式取得、新規設立又は相対的重要性の増大により、8社を連結の範囲に含めております。

また、清算終了等により、4社を連結の範囲から除外しております。

主要な連結子会社名は、本報告書の「第1 企業の概況 4. 関係会社の状況」に記載しているため省略しております。

(2) 主要な非連結子会社の名称等

主要な非連結子会社の名称

エス イー アイ エイチアール サービスズ インク

なお、非連結子会社は、いずれも小規模であり、合計の総資産、売上高、当期純損益及び利益剰余金等は、いずれも連結財務諸表に重要な影響を及ぼしておりません。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法を適用した非連結子会社及び関連会社の数

持分法を適用した非連結子会社の数 2社

持分法を適用した関連会社の数 35社

当連結会計年度より、株式取得又は新規設立により、関連会社2社を持分法適用の範囲に含めております。

また、株式売却等により、関連会社3社を持分法適用の範囲から除外しています。

主要な持分法適用会社名は、本報告書の「第1 企業の概況 4. 関係会社の状況」に記載しているため省略しております。

(2) 持分法を適用していない非連結子会社及び関連会社の名称等

主要な会社等の名称

近畿電機株式会社

なお、持分法を適用していない非連結子会社及び関連会社は、当期純損益及び利益剰余金等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に及ぼす影響が軽微であり、かつ、全体としても重要性が乏しく、連結財務諸表に重要な影響を及ぼしておりません。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

決算日が連結決算日と異なる連結子会社は、5社を除き、連結財務情報のより適正な開示を図るため、連結決算日において仮決算を実施した上で連結しております。当該5社の決算日は12月31日であります。連結財務諸表の作成にあたっては同決算日の財務諸表を使用し、連結決算日との間に生じた重要な取引について連結上必要な調整を行っております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

① 有価証券

満期保有目的の債券

償却原価法を採用しております。

その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）を採用しております。

時価のないもの

移動平均法による原価法を採用しております。

② デリバティブ

時価法を採用しております。

③ たな卸資産

主として総平均法による原価法（貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）を採用しております。

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産（リース資産を除く）

定額法を採用しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

① 貸倒引当金

債権の貸倒による損失に備えるため、一般債権については、貸倒実績率により算定した額を、貸倒懸念債権については、担保処分等による回収見込額を控除した残額のうち債務者の財政状況等を考慮して算定した額を、破産更生債権等については、担保処分等による回収見込額を控除した残額をそれぞれ貸倒見積額として計上しております。

② 役員退職慰労引当金

一部の国内連結子会社は、役員に対する退職慰労金の支払に充てるため、内規に基づく基準額を引当計上しております。

③ 役員賞与引当金

当社及び一部の国内連結子会社は、役員賞与の支出に備えて、当連結会計年度における支給見込額に基づき計上しております。

④ 完成工事補償引当金

一部の連結子会社は、完成工事に係る瑕疵担保の費用に備えるため、将来の見積補修額に基づいて計上しております。

⑤ 受注損失引当金

当社及び一部の連結子会社は、手持受注工事等のうち期末において損失が確実視され、かつ、その金額を合理的に見積ることができる工事等については、翌連結会計年度以降に発生が見込まれる損失を引当計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

② 数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（主として15年）による定額法により、また、一部の連結子会社は発生時に一括して費用処理しております。

数理計算上の差異は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（主として15年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌連結会計年度から費用処理することとしております。なお、一部の連結子会社は発生時に一括して費用処理しております。

(5) 重要な収益及び費用の計上基準

完成工事高及び完成工事原価の計上基準

当連結会計年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる工事

工事進行基準（工事の進捗率の見積りは原価比例法）を適用しております。

その他の工事

工事完成基準を適用しております。

(6) 重要なヘッジ会計の方法

① ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理を採用しております。

なお、為替予約及び通貨スワップについては振当処理の要件を満たしている場合は振当処理を採用しております。また、金利スワップについては特例処理の要件を満たしている場合は特例処理を採用しております。

② ヘッジ手段とヘッジ対象

<u>ヘッジ手段</u>	<u>ヘッジ対象</u>
為替予約	外貨建債権債務及び外貨建予定取引
通貨スワップ	外貨建借入金等
金利スワップ	借入金等
商品先渡取引等	原材料

③ ヘッジ方針

当社及び連結子会社が実施している為替予約、通貨スワップ、金利スワップ及び商品先渡取引等は、各社の内部規程などにに基づき、為替変動リスク、金利変動リスク及び価格変動リスクを回避するために行っております。

④ ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ取引毎に、ヘッジ手段とヘッジ対象の対応関係を確認して評価しております。ただし、特例処理によっている金利スワップについては、有効性の評価を省略しております。

(7) のれんの償却方法及び償却期間

のれんの償却については、収益獲得見込期間等を勘案し、20年以内で均等償却を行っております。

なお、当連結会計年度における償却期間は主として5年又は10年となっております。

(8) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金（現金及び現金同等物）は、手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から3か月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(9) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

① 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

② 連結納税制度の適用

当社及び一部の連結子会社は、連結納税制度を適用しております。

(未適用の会計基準等)

- ・「連結財務諸表作成における在外子会社等の会計処理に関する当面の取扱い」（実務対応報告第18号 平成29年3月29日）
- ・「持分法適用関連会社の会計処理に関する当面の取扱い」（実務対応報告第24号 平成29年3月29日）

(1) 概要

指定国際会計基準又は修正国際基準に準拠した連結財務諸表を作成して、金融商品取引法に基づく有価証券報告書により開示している国内子会社又は国内関連会社を「連結財務諸表作成における在外子会社等の会計処理に関する当面の取扱い」等の対象範囲に含めることとする改正であります。

(2) 適用予定日

平成30年3月期の期首から適用します。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「連結財務諸表作成における在外子会社等の会計処理に関する当面の取扱い」等の改正による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であります。

(表示方法の変更)

(連結損益計算書)

前連結会計年度において、独立掲記しておりました「営業外費用」の「クレーム損」は金額的重要性が乏しくなったため、当連結会計年度においては「その他」に含めて表示しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において、「営業外費用」の「クレーム損」に表示していた2,866百万円は、「その他」として組み替えております。

(連結キャッシュ・フロー計算書)

前連結会計年度において、独立掲記していた「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「法人税等の還付額」は金額的重要性が乏しくなったため、当連結会計年度より「法人税等の支払額」に含めて表示しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結キャッシュ・フロー計算書において、「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「法人税等の還付額」に表示していた4,911百万円は、「法人税等の支払額」として組み替えております。

前連結会計年度において、「財務活動によるキャッシュ・フロー」の「その他」に含めていた「自己株式の取得による支出」は、金額的重要性が増したため、当連結会計年度より独立掲記することとしました。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結キャッシュ・フロー計算書において、「財務活動によるキャッシュ・フロー」の「その他」に表示していた153百万円は、「自己株式の取得による支出」△6百万円、「その他」159百万円として組み替えております。

(追加情報)

(繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針の適用)

「繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第26号 平成28年3月28日)を当連結会計年度から適用しております。

(連結貸借対照表関係)

※1 たな卸資産の内訳は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
商品及び製品	134,696百万円	138,595百万円
仕掛品	153,257	167,635
原材料及び貯蔵品	135,023	142,840

※2 非連結子会社及び関連会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
投資有価証券(株式)	264,986百万円 (18,525百万円)	283,540百万円 (19,418百万円)

上記のうち、()内書は共同支配企業に対する投資の金額を示しております。

※3 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
有形固定資産	3,044百万円 (146百万円)	2,956百万円 (142百万円)

担保付債務は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
短期借入金	536百万円 (170百万円)	389百万円 (一百万円)
長期借入金	956 (一)	585 (一)
計	1,492 (170)	974 (一)

上記のうち、()内書は財団抵当並びに当該債務を示しております。

4 保証債務

下記保証先の銀行借入金等に対する債務保証額

(1) 保証

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)		当連結会計年度 (平成29年3月31日)	
富通住電特種光纜（天津） 有限公司	1,960百万円	(1,960百万円)	富通住電特種光纜（天津） 有限公司	1,836百万円 (1,836百万円)
富通住電光纜（成都） 有限公司	924	(924)	住電軽合金（常州） 有限公司	1,346 (1,346)
従業員（財形銀行融資等）	505	(505)	従業員（財形銀行融資等）	384 (384)
その他8社	1,670	(1,489)	その他6社	1,275 (1,275)
計	5,059	(4,878)	計	4,841 (4,841)

(2) 保証予約

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)		当連結会計年度 (平成29年3月31日)	
精密焼結合金（無錫） 有限公司	878百万円	(878百万円)	精密焼結合金（無錫） 有限公司	431百万円 (431百万円)
計	878	(878)	計	431 (431)

(3) 経営指導念書

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)		当連結会計年度 (平成29年3月31日)	
住電軽合金（常州） 有限公司	1,340百万円	(1,340百万円)	住電軽合金（常州） 有限公司	1,034百万円 (1,034百万円)
オーオーオー ウラル ワイヤリング システムズ	371	(189)	その他1社	9 (9)
その他4社	66	(66)		
計	1,777	(1,595)	計	1,043 (1,043)

上記のうち、()内書は自己負担額を示しております。

5 受取手形割引高

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
受取手形割引高	1,558百万円	782百万円

6 受取手形裏書譲渡高

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
受取手形裏書譲渡高	608百万円	390百万円

7 その他

前連結会計年度（平成28年3月31日）

自動車関連事業において、同分野の競争法違反行為により損害を被ったとして、米国等において集団訴訟が当社及び当社子会社に対して提起されているほか、一部の自動車メーカーと損害賠償に関する交渉を行っております。

当連結会計年度（平成29年3月31日）

自動車関連事業分野の競争法違反行為について、一部の自動車メーカーと損害賠償に関する交渉を行っております。

(連結損益計算書関係)

※1 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
荷造費、運送費及び販売諸経費	75,852百万円	73,745百万円
給料手当及び福利費	137,673	135,441
退職給付費用	7,178	5,991
研究開発費	53,600	54,082

※2 一般管理費及び当期製造費用に含まれる研究開発費の総額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
	110,839百万円	115,155百万円

※3 売上原価に含まれる受注損失引当金繰入額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
	3,043百万円	3,630百万円

※4 固定資産除却損の主な内容は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
建物及び構築物	880百万円	1,161百万円
機械装置及び運搬具	1,815	2,311
工具、器具及び備品	501	777

※5 事業構造改善費用

前連結会計年度(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

当社及び一部の連結子会社において、事業環境の急激な悪化に対応した生産体制の効率化と新製品開発力の強化のため事業拠点の再編と研究開発テーマの一部見直しを行ったこと、また、収益力強化のため事業規模に応じた人員数の適正化を行ったことなどに伴うものであり、主な内容は減損損失2,926百万円及び特別退職金1,202百万円であります。

当連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

PC鋼材事業、ブラジルハーネス事業等の効率化を目的とした事業拠点の再編に伴うものであり、主な内容は減損損失2,391百万円及び固定資産除却損1,877百万円であります。

※6 減損損失

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

当社グループは以下の資産グループについて減損損失を計上しました。

場所	用途	種類	減損損失 (百万円)
—	その他	のれん	7,315
富山県富山市	モリブデン金属製品製造設備等	機械装置、建物等	2,312
大阪製作所（大阪市此花区）他	研究開発設備等	機械装置、建物等	1,356
タイ ラヨーン県他	防振ゴム・自動車用ホース製造設備等	機械装置、建物等	1,265
伊丹製作所（兵庫県伊丹市）他	製造設備等	機械装置、建物等	3,157
合計			15,405

上記のうち、減損損失として表示したもの

12,479

上記のうち、事業構造改善費用として表示したもの（※5参照）

2,926

当社グループは、主として事業部別にグルーピングを行っており、合計15,405百万円を特別損失（うち2,926百万円は事業構造改善費用として表示しております。※5参照）に計上しました。

その内訳は、のれん7,315百万円、機械装置及び運搬具5,338百万円、建物及び構築物1,651百万円、工具、器具及び備品他1,101百万円であります。

上記ののれんの減損損失は、主に電力ケーブル事業に係るのれんについて、同事業の業績がのれん計上時の事業計画を下回っていることから短期的な超過収益力が毀損していると判断し、「連結財務諸表における資本連結手続に関する実務指針」（会計制度委員会報告第7号 平成26年11月28日）第32項の規定に基づき、当該のれんを減損処理したものであります。

上記のモリブデン金属製品製造設備等及び防振ゴム・自動車用ホース製造設備等は、事業環境の悪化による収益性の低下に伴い、帳簿価額を回収可能価額まで減額しております。回収可能価額は使用価値により測定しており、将来キャッシュフローを前者は6%、後者は4%～14%で割り引いて算定しております。

上記の研究開発設備等は、新製品開発力の強化のため研究開発テーマの一部見直しを行ったことに伴い、将来遊休化する見込みである資産について帳簿価額を回収可能価額まで減額しております。回収可能価額は主として正味売却価額により測定しており、売却可能価額等に基づいた時価で評価しております。

上記のほか、遊休状態にあり将来の用途が定まっていなかったり又は将来遊休化する見込みである製造設備等についても帳簿価額を回収可能価額まで減額しております。回収可能価額は主として正味売却価額により測定しており、売却可能価額等に基づいた時価で評価しております。

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

当社グループは以下の資産グループについて減損損失を計上しました。

場所	用途	種類	減損損失 (百万円)
伊丹製作所（兵庫県伊丹市）	PC鋼材製造設備等	機械装置、建物等	946
横浜製作所（横浜市栄区）他	工場建屋等	機械装置、建物等	1,445
合計			2,391

上記のうち、減損損失として表示したもの

—

上記のうち、事業構造改善費用として表示したもの（※5参照）

2,391

当社グループは、主として事業部別にグルーピングを行っており、合計2,391百万円を特別損失（事業構造改善費用として表示しております。※5参照）に計上しました。

その内訳は、建物及び構築物1,293百万円、機械装置及び運搬具482百万円、工具、器具及び備品他616百万円であります。

上記のPC鋼材製造設備等は、一部事業拠点の再編に伴い、将来遊休化する見込みである資産について帳簿価額を回収可能価額まで減額しております。回収可能価額は主として正味売却価額により測定しており、売却可能価額等に基づいた時価で評価しております。

上記のほか、事業拠点の再編に伴い、遊休状態にあり将来の用途が定まっていなかったり又は将来遊休化する見込みである工場建屋等についても帳簿価額を回収可能価額まで減額しております。回収可能価額は主として正味売却価額により測定しており、売却可能価額等に基づいた時価で評価しております。

※7 特別輸送費

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

一部の米国連結子会社において、米国西海岸の港湾施設での労務関係の急激な悪化により生じた荷役作業の長期にわたる遅延に伴い、輸入製品・原材料に係る輸送費が著しく増加したことによるものであります。

(連結包括利益計算書関係)

※ その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	△47,766百万円	9,349百万円
組替調整額	△31,967	△8,473
税効果調整前	△79,733	876
税効果額	24,935	3,625
その他有価証券評価差額金	△54,798	4,501
繰延ヘッジ損益：		
当期発生額	4,098	△2,898
組替調整額	254	△17
税効果調整前	4,352	△2,915
税効果額	△1,159	900
繰延ヘッジ損益	3,193	△2,015
為替換算調整勘定：		
当期発生額	△53,420	△15,315
組替調整額	△265	32
税効果調整前	△53,685	△15,283
税効果額	—	—
為替換算調整勘定	△53,685	△15,283
退職給付に係る調整額：		
当期発生額	△41,963	22,940
組替調整額	2,006	3,426
税効果調整前	△39,957	26,366
税効果額	12,657	△8,271
退職給付に係る調整額	△27,300	18,095
持分法適用会社に対する持分相当額：		
当期発生額	△17,038	△9,424
組替調整額	3,644	△1,880
持分法適用会社に対する持分相当額	△13,394	△11,304
その他の包括利益合計	△145,984	△6,006

(注) 持分法適用会社に対する持分相当額の組替調整額は資産の取得原価調整額を含めて表示しております。

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自平成27年4月1日至平成28年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数(千株)	当連結会計年度 増加株式数(千株)	当連結会計年度 減少株式数(千株)	当連結会計年度末 株式数(千株)
発行済株式				
普通株式	793,941	—	—	793,941
合計	793,941	—	—	793,941
自己株式				
普通株式(注)1, 2	749	5	0	754
合計	749	5	0	754

(注) 1. 普通株式の自己株式の株式数の増加5千株は、単元未満株式の買取による増加3千株、持分法適用関連会社
が取得した自己株式(当社株式)の当社帰属分2千株であります。

2. 普通株式の自己株式の株式数の減少0千株は、単元未満株式の買増請求による減少0千株であります。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成27年6月25日 定時株主総会	普通株式	14,280	18.00	平成27年3月31日	平成27年6月26日
平成27年10月29日 取締役会	普通株式	13,487	17.00	平成27年9月30日	平成27年12月1日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成28年6月24日 定時株主総会	普通株式	14,280	利益剰余金	18.00	平成28年3月31日	平成28年6月27日

3. その他の事項

※ 利益剰余金当期変動額の「その他」は、12月決算の持分法適用関連会社が「退職給付に関する会計基準」
(企業会計基準第26号平成24年5月17日)及び「退職給付に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準
適用指針第25号平成27年3月26日)を適用したことに伴い、退職給付債務及び勤務費用の計算方法を変更
したことによる影響額△1,631百万円及び一部の海外連結子会社が決算日の3月31日への変更又は連結決算
日において仮決算を実施した上で連結することへの変更を行ったことによる影響額△979百万円でありま
す。

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数（千株）	当連結会計年度 増加株式数（千株）	当連結会計年度 減少株式数（千株）	当連結会計年度末 株式数（千株）
発行済株式				
普通株式	793,941	—	—	793,941
合計	793,941	—	—	793,941
自己株式				
普通株式（注）1, 2	754	13,295	0	14,049
合計	754	13,295	0	14,049

（注）1. 普通株式の自己株式の株式数の増加13,295千株は、平成28年5月13日開催の取締役会決議に基づく自己株式の取得13,245千株、単元未満株式の買取による増加2千株、持分法適用関連会社が取得した自己株式（当社株式）の当社帰属分48千株であります。

2. 普通株式の自己株式の株式数の減少0千株は、単元未満株式の買増請求による減少0千株であります。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

（決議）	株式の種類	配当金の総額 （百万円）	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
平成28年6月24日 定時株主総会	普通株式	14,280	18.00	平成28年3月31日	平成28年6月27日
平成28年11月1日 取締役会	普通株式	13,261	17.00	平成28年9月30日	平成28年12月1日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

（決議）	株式の種類	配当金の総額 （百万円）	配当の原資	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
平成29年6月28日 定時株主総会	普通株式	17,942	利益剰余金	23.00	平成29年3月31日	平成29年6月29日

（連結キャッシュ・フロー計算書関係）

※ 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 （自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）	当連結会計年度 （自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）
現金及び預金勘定	174,686百万円	180,034百万円
有価証券に含まれる現金同等物	57	792
預入期間が3か月を超える定期預金	△688	△824
現金及び現金同等物	174,055	180,002

（リース取引関係）

（借主側）

1. ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

リース資産の減価償却の方法

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。

2. オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

（単位：百万円）

	前連結会計年度 （平成28年3月31日）	当連結会計年度 （平成29年3月31日）
1年内	4,194	4,352
1年超	12,933	13,780
合計	17,127	18,132

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、事業運営に必要な設備資金や運転資金等をキャッシュ・フロー計画に基づき調達（主に銀行借入や社債発行）しております。一時的な余資は安全性の高い金融資産で運用しております。また、デリバティブは、後述するリスクを回避するために利用しており、投機的な取引は行わない方針であります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。また、グローバルに事業を展開していることから生じている外貨建営業債権は、為替の変動リスクに晒されておりますが、原則として外貨建営業債務をネットしたポジションについて先物為替予約取引等を利用してヘッジしております。有価証券及び投資有価証券は、主に取引先企業との長期的な取引関係の維持構築等のために保有する株式であり、市場価格の変動リスクに晒されております。

営業債務である支払手形及び買掛金は、ほとんど1年以内の支払期日であります。また、その一部には、原料等の輸入に伴う外貨建のものがあり、為替の変動リスクに晒されておりますが、恒常的に同じ外貨建の売掛金残高の範囲内にあります。借入金及び社債は、主に設備投資や運転資金等に必要な資金の調達を目的としたものであります。このうち一部は、金利変動に伴うキャッシュ・フロー変動リスク又は公正価値の変動リスクをヘッジするためデリバティブ取引（金利スワップ取引等）を利用しております。

デリバティブ取引は、外貨建債権債務に係る為替の変動リスクに対するヘッジ取引を目的とした先物為替予約取引等、借入金及び社債に係る金利変動に伴うキャッシュ・フロー変動リスク又は公正価値変動リスクに対するヘッジ取引を目的とした金利スワップ取引等、原材料に係る価格変動リスクに対するヘッジ取引を目的とした商品先渡取引等であります。なお、ヘッジ会計に関するヘッジ手段とヘッジ対象、ヘッジ方針、ヘッジの有効性の評価方法等については、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項 4.

(6) 重要なヘッジ会計の方法」に記載しております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

① 信用リスク（取引先の契約不履行等に係るリスク）の管理

当社は、与信管理規程に従い、営業債権について、各事業部門における営業部門が主要な取引先の状況を定期的にモニタリングし、取引相手ごとに期日及び残高を管理するとともに、財務状況等の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図っております。連結子会社についても、当社の与信管理規程に準じて、同様の管理を行っております。

デリバティブ取引の利用にあたっては、カウンターパーティーリスクを軽減するために、信用力の高い金融機関及び商社とのみ取引を行っております。

② 市場リスク（為替や金利等の変動リスク）の管理

当社及び一部の連結子会社は、外貨建債権債務について、通貨別月別に把握された為替の変動リスクに対して、原則として先物為替予約取引等を利用してヘッジしております。予定取引により確実に発生すると見込まれる外貨建営業債権債務に対しても原則として先物為替予約取引等を行っております。また、当社及び一部の連結子会社は、借入金及び社債等の金融商品に係る金利変動に伴うキャッシュ・フローの変動リスク又は公正価値の変動リスクを抑制するために、金利スワップ取引等を利用しております。

有価証券及び投資有価証券については、定期的に時価や発行体（取引先企業）の財務状況等を把握し、継続保有の必要性を見直しております。

デリバティブ取引については、当社は取引権限や限度額等を定めたデリバティブ取引管理規程に基づき、取引主管部署が取引・記帳を行い、管理業務担当部署において契約先と残高照合等を行っております。一部の連結子会社についても、当社のデリバティブ取引管理規程に準じて、管理を行っております。

③ 資金調達に係る流動性リスク（支払期日に支払いを実行できなくなるリスク）の管理

当社は、各部署からの報告に基づき財務部が適時にキャッシュ・フロー計画を作成・更新するとともに、事業運営に必要な手許流動性を維持することなどにより管理しております。連結子会社についても、当社の運営方針に準じて管理を行っております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することもあります。

また、「デリバティブ取引関係」注記におけるデリバティブ取引に関する契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含めておりません（（注）2. 参照）。

前連結会計年度（平成28年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金及び預金	174,686	174,686	—
(2) 受取手形及び売掛金	622,944	622,944	—
(3) 有価証券及び投資有価証券	327,993	455,109	127,116
資産計	1,125,623	1,252,739	127,116
(1) 支払手形及び買掛金	349,360	349,360	—
(2) 短期借入金	162,213	162,213	—
(3) 社債	35,610	36,124	514
(4) 長期借入金	256,239	263,376	7,137
負債計	803,422	811,073	7,651
デリバティブ取引（*）	2,101	2,101	—

（*）デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については（ ）で示しております。

当連結会計年度（平成29年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金及び預金	180,034	180,034	—
(2) 受取手形及び売掛金	648,411	648,411	—
(3) 有価証券及び投資有価証券	348,381	548,312	199,931
資産計	1,176,826	1,376,757	199,931
(1) 支払手形及び買掛金	378,110	378,110	—
(2) 短期借入金	179,584	179,584	—
(3) 社債	75,000	75,164	164
(4) 長期借入金	253,862	258,115	4,253
負債計	886,556	890,973	4,417
デリバティブ取引（*）	280	280	—

（*）デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については（ ）で示しております。

（注）1. 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

資 産

(1) 現金及び預金、並びに (2) 受取手形及び売掛金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(3) 有価証券及び投資有価証券

有価証券は、短期間で決済されるため、時価は帳簿価額とほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。投資有価証券は、市場価格のあるものは、市場価格によっており、市場価格のないものは、対象金融資産から発生する将来キャッシュ・フローを割り引くことにより算定しております。また、保有目的ごとの有価証券に関する事項については、「有価証券関係」注記をご参照下さい。

負 債

(1) 支払手形及び買掛金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(2) 短期借入金

これらは1年以内に弁済期限が到来するため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(3) 社債

これらの時価は、市場価格に基づいております。

(4) 長期借入金

これらの時価は、元利金の合計額を、新規に同様の借入を行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しております。

デリバティブ取引

「デリバティブ取引関係」注記をご参照下さい。

2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
非上場株式等（その他有価証券）	7,736	6,247
非上場関連会社株式等	85,087	83,496

これらについては、市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積ることなどができず、時価を把握することが極めて困難と認められるため、「(3)有価証券及び投資有価証券」には含めておりません。

3. 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度（平成28年3月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	174,686	—	—	—
受取手形及び売掛金	611,733	11,211	—	—
有価証券及び投資有価証券				
満期保有目的の債券				
(1) 国債・地方債等	—	—	—	—
(2) 社債	—	—	—	—
その他有価証券のうち満期があるもの				
(1) 債券	—	—	—	—
(2) その他	—	99	—	—
合計	786,419	11,310	—	—

当連結会計年度（平成29年3月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	180,034	—	—	—
受取手形及び売掛金	635,466	12,945	—	—
有価証券及び投資有価証券				
満期保有目的の債券				
(1) 国債・地方債等	—	—	—	—
(2) 社債	—	—	—	—
その他有価証券のうち満期があるもの				
(1) 債券	—	—	—	—
(2) その他	733	—	—	—
合計	816,233	12,945	—	—

4. 社債、長期借入金、リース債務及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度（平成28年3月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	113,453	—	—	—	—	—
社債	10,610	15,000	—	—	—	10,000
長期借入金	48,760	30,003	41,624	50,104	40,792	93,716
リース債務	670	352	249	183	142	1,487
合計	173,493	45,355	41,873	50,287	40,934	105,203

当連結会計年度（平成29年3月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	146,733	—	—	—	—	—
社債	15,000	—	—	—	10,000	50,000
長期借入金	32,851	47,230	56,104	45,928	34,900	69,700
リース債務	518	151	186	158	155	1,375
合計	195,102	47,381	56,290	46,086	45,055	121,075

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度 (平成28年 3月31日)

	種類	連結貸借対照表 計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えるもの	(1) 株式	135,062	23,300	111,762
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	10,564	10,000	564
	小計	145,626	33,300	112,326
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えないもの	(1) 株式	2,312	2,724	△412
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	156	156	—
	小計	2,468	2,880	△412
合計		148,094	36,180	111,914

(注) 非上場株式等 (連結貸借対照表計上額7,736百万円) については、市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積ることなどができず、時価を把握することが極めて困難と認められるため、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

当連結会計年度 (平成29年 3月31日)

	種類	連結貸借対照表 計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えるもの	(1) 株式	136,797	25,420	111,377
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	10,389	10,000	389
	小計	147,186	35,420	111,766
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えないもの	(1) 株式	359	408	△49
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	792	792	—
	小計	1,151	1,200	△49
合計		148,337	36,620	111,717

(注) 非上場株式等 (連結貸借対照表計上額6,247百万円) については、市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積ることなどができず、時価を把握することが極めて困難と認められるため、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

2. 売却したその他有価証券

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
(1) 株式	38,265	32,079	16
(2) 債券			
① 国債・地方債等	—	—	—
② 社債	—	—	—
③ その他	—	—	—
(3) その他	—	—	—
合計	38,265	32,079	16

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
(1) 株式	20,290	14,432	24
(2) 債券			
① 国債・地方債等	—	—	—
② 社債	—	—	—
③ その他	—	—	—
(3) その他	—	—	—
合計	20,290	14,432	24

3. 減損処理を行った有価証券

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

有価証券について843百万円（その他有価証券の株式63百万円、非連結子会社株式286百万円、持分法非適用関連会社株式494百万円）減損処理を行っております。

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

有価証券について1,871百万円（その他有価証券の株式26百万円、非連結子会社株式1,838百万円、持分法非適用関連会社株式7百万円）減損処理を行っております。

(デリバティブ取引関係)

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

(1) 通貨関連

前連結会計年度 (平成28年3月31日)

区分	取引の種類	契約額等 (百万円)	契約額等の うち1年超 (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
市場取引以外の取引	為替予約取引等				
	売建				
	米ドル	32,420	—	1,008	1,008
	ユーロ	53,076	—	477	477
	その他	7,050	850	542	542
	買建				
	米ドル	6,932	—	△23	△23
	ユーロ	4,397	—	△136	△136
	タイバーツ	8,952	—	△189	△189
	人民元	4,115	1,576	△508	△508
その他	609	—	0	0	
	合計	117,551	2,426	1,171	1,171

(注) 時価の算定方法 取引先金融機関等から提示された価格等に基づき算定しております。

当連結会計年度 (平成29年3月31日)

区分	取引の種類	契約額等 (百万円)	契約額等の うち1年超 (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
市場取引以外の取引	為替予約取引等				
	売建				
	米ドル	12,628	2	△37	△37
	ユーロ	50,396	575	238	238
	その他	8,634	2,026	306	306
	買建				
	米ドル	7,674	—	△93	△93
	ユーロ	656	—	△8	△8
	タイバーツ	10,736	—	77	77
	その他	1,284	—	6	6
	合計	92,008	2,603	489	489

(注) 時価の算定方法 取引先金融機関等から提示された価格等に基づき算定しております。

(2) 商品関連

前連結会計年度（平成28年3月31日）

区分	取引の種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち1年超 (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
市場取引以外の取引	銅LME先物取引				
	売建	2,823	—	△10	△10
	買建	1,169	—	△2	△2
	合計	3,992	—	△12	△12

(注) 時価の算定方法 取引先ブローカー等から提示された価格等に基づき算定しております。

当連結会計年度（平成29年3月31日）

区分	取引の種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち1年超 (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
市場取引以外の取引	銅LME先物取引				
	売建	739	—	4	4
	買建	737	—	0	0
	合計	1,476	—	4	4

(注) 時価の算定方法 取引先ブローカー等から提示された価格等に基づき算定しております。

2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

(1) 通貨関連

前連結会計年度（平成28年3月31日）

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等の うち1年超 (百万円)	時価 (百万円)
為替予約等の振当 処理	為替予約取引	外貨建 債権債務			
	売建				
	米ドル		90,995	808	39
	ユーロ		29,279	11,335	903
	その他		18,686	956	124
	買建				
	米ドル		14,253	67	△58
	ユーロ		1,833	72	△37
人民元	2,174	—	18		
その他	766	—	△11		
原則的処理方法	為替予約取引	外貨建 債権債務			
	売建				
	米ドル		218	—	5
	台湾ドル		18,654	5,212	△57
	買建				
	米ドル		829	—	△10
ユーロ	8	—	0		
その他	460	—	42		
合計			178,155	18,450	958

(注) 1. 時価の算定方法 先物為替相場等に基づいて算定しております。

2. 為替予約等の振当処理（ただし、予定取引をヘッジ対象としている場合を除く。）によるものは、ヘッジ対象とされている外貨建債権債務と一体として処理されているため、その時価は、当該外貨建債権債務の時価に含めて記載しております。

当連結会計年度（平成29年3月31日）

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等の うち1年超 (百万円)	時価 (百万円)
為替予約等の振当 処理	為替予約取引	外貨建 債権債務			
	売建				
	米ドル		108,747	484	77
	ユーロ		18,968	6,324	877
	その他		25,750	340	△230
	買建				
	米ドル		16,568	33	12
	ユーロ		988	201	△9
その他	3,220	—	△226		
原則的処理方法	為替予約取引	外貨建 債権債務			
	売建				
	米ドル		348	—	△21
	台湾ドル		17,445	—	△969
	買建				
米ドル	1,047	—	268		
ユーロ	10	10	0		
合計			193,091	7,392	△221

(注) 1. 時価の算定方法 先物為替相場等に基づいて算定しております。

2. 為替予約等の振当処理（ただし、予定取引をヘッジ対象としている場合を除く。）によるものは、ヘッジ対象とされている外貨建債権債務と一体として処理されているため、その時価は、当該外貨建債権債務の時価に含めて記載しております。

(2) 金利関連

前連結会計年度（平成28年3月31日）

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等の うち1年超 (百万円)	時価 (百万円)
金利スワップの特例 処理	金利スワップ取引 変動受取・固定支払	借入金	152,896	140,760	(*)
金利通貨スワップの 原則的処理方法	金利通貨スワップ取引 変動受取・固定支払 円受取・インドネシア ルピア支払	借入金	292	146	44
金利通貨スワップの 特例処理	金利通貨スワップ取引 変動受取・固定支払 円受取・ユーロ支払	貸付金	147	—	13
合計			153,335	140,906	57

(*) 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該借入金の時価に含めて記載しております。

(注) 時価の算定方法 取引先金融機関等から提示された価格等に基づき算定しております。

当連結会計年度（平成29年3月31日）

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等の うち1年超 (百万円)	時価 (百万円)
金利スワップの特例 処理	金利スワップ取引 変動受取・固定支払	借入金	151,013	145,270	(*)
金利通貨スワップの 原則的処理方法	金利通貨スワップ取引 変動受取・固定支払 円受取・インドネシア ルピア支払	借入金	144	—	22
合計			151,157	145,270	22

(*) 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該借入金の時価に含めて記載しております。

(注) 時価の算定方法 取引先金融機関等から提示された価格等に基づき算定しております。

(3) 商品関連

前連結会計年度（平成28年3月31日）

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等の うち1年超 (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理方法	銅LME先物取引 売建	原材料	3,037	—	△58
	ニッケルLME先物取引 売建	原材料	1,001	—	142
	買建		186	—	△5
	アルミLME先物取引 売建	原材料	223	—	△3
	買建		17	—	0
	銅スワップ取引 変動受取・固定支払	原材料	1,419	436	△133
銀スワップ取引 変動受取・固定支払	原材料	256	200	△16	
合計			6,139	636	△73

(注) 時価の算定方法 取引先ブローカー等から提示された価格等に基づき算定しております。

当連結会計年度（平成29年3月31日）

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等の うち1年超 (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理方法	銅LME先物取引 売建	原材料	3,298	—	△8
	買建		356	—	△2
	ニッケルLME先物取引 売建	原材料	824	—	△77
	買建		691	—	△26
	アルミLME先物取引 売建	原材料	601	—	△16
	買建		17	—	1
銅スワップ取引 変動受取・固定支払	原材料	1,218	316	95	
銀スワップ取引 変動受取・固定支払	原材料	181	142	19	
合計			7,186	458	△14

(注) 時価の算定方法 取引先ブローカー等から提示された価格等に基づき算定しております。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社及び国内連結子会社は、確定給付型の制度として、企業年金基金制度、厚生年金基金制度、退職一時金制度及び社内年金制度等を設けております。また、当社及び一部の国内連結子会社は、確定拠出年金制度及び前払退職金制度を設けております。なお、従業員の退職等に関して、退職給付会計に準拠した数理計算による退職給付債務の対象とされない割増退職金を支払う場合があります。

また、当社及び一部の国内連結子会社の企業年金基金制度、退職一時金制度及び社内年金制度等において退職給付信託を設定しております。

なお、一部の海外連結子会社では確定給付型の制度及び確定拠出年金制度を設けております。

また、一部の連結子会社は、退職給付債務の算定にあたり、簡便法を採用しております。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表 (簡便法を適用した制度を除く。)

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
退職給付債務の期首残高	288,032百万円	301,449百万円
勤務費用	12,662	13,608
利息費用	4,474	3,772
数理計算上の差異の発生額	10,634	395
退職給付の支払額	△12,940	△14,185
企業結合の影響による増減額	—	10,481
その他	△1,413	△79
退職給付債務の期末残高	301,449	315,441

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表 (簡便法を適用した制度を除く。)

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
年金資産の期首残高	355,915百万円	327,281百万円
期待運用収益	3,454	3,899
数理計算上の差異の発生額	△35,014	23,465
事業主からの拠出額	13,580	10,428
退職給付の支払額	△8,529	△9,229
企業結合の影響による増減額	—	5,916
その他	△2,125	△298
年金資産の期末残高	327,281	361,462

(3) 簡便法を適用した制度の、退職給付に係る負債 (又は資産) の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
退職給付に係る負債 (又は資産) の期首残高	1,986百万円	1,666百万円
退職給付費用	404	859
退職給付の支払額	△111	△64
制度への拠出額	△136	△106
その他	△477	△520
退職給付に係る負債 (又は資産) の期末残高	1,666	1,835

- (4) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	275,493百万円	286,055百万円
年金資産	△330,870	△363,569
	△55,377	△77,514
非積立型制度の退職給付債務	31,211	33,328
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△24,166	△44,186
退職給付に係る負債	51,562	54,553
退職給付に係る資産	△75,728	△98,739
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△24,166	△44,186

(注) 簡便法を適用した制度を含みます。

- (5) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自平成27年4月1日 至平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)
勤務費用	12,662百万円	13,608百万円
利息費用	4,474	3,772
期待運用収益	△3,454	△3,899
数理計算上の差異の費用処理額	5,796	3,627
過去勤務費用の費用処理額	△141	△11
簡便法で計算した退職給付費用	404	859
その他	183	189
確定給付制度に係る退職給付費用	19,924	18,145

(注) 上記の退職給付費用以外に特別退職金を特別損失「事業構造改善費用」に、前連結会計年度1,202百万円、当連結会計年度1,146百万円計上しております。

- (6) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自平成27年4月1日 至平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)
過去勤務費用	235百万円	454百万円
数理計算上の差異	39,722	△26,820
合計	39,957	△26,366

- (7) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
未認識過去勤務費用	△491百万円	△37百万円
未認識数理計算上の差異	△22	△26,842
合計	△513	△26,879

(8) 年金資産に関する事項

①年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
株式	46.9%	48.3%
債券	26.8	25.3
一般勘定	12.1	11.5
現金及び預金	2.2	2.0
その他	12.0	12.9
合計	100.0	100.0

(注) 年金資産合計には、企業年金制度に対して設定した退職給付信託が前連結会計年度42.8%、当連結会計年度43.9%含まれております。

②長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(9) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎 (加重平均で表わしている。)

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
割引率	1.2%	1.2%
長期期待運用収益率	1.1%	1.2%

なお、当社及び一部の連結子会社はポイント制を採用しているため、退職給付債務の算定に際して予想昇給率を使用しておりません。

(注) 確定給付制度には、一部の連結子会社が加入している複数事業主による企業年金制度が含まれておりません。

3. 確定拠出制度及び前払退職金制度

当社及び連結子会社の確定拠出制度及び前払退職金制度の要支払額は、前連結会計年度5,927百万円、当連結会計年度5,150百万円であります。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
繰延税金資産		
繰越欠損金	56,544百万円	52,943百万円
固定資産	19,241	18,169
退職給付に係る負債	16,491	17,343
未払賞与	11,692	12,096
たな卸資産	10,122	10,923
未実現利益	10,003	9,901
投資有価証券	3,954	3,961
貸倒引当金	1,424	1,606
未払事業税	1,652	1,249
その他	34,376	30,831
繰延税金資産小計	165,499	159,022
評価性引当額	△62,015	△60,322
繰延税金資産合計	103,484	98,700
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△37,293	△33,700
連結子会社等の留保利益金	△26,349	△23,162
退職給付に係る資産	△16,695	△22,831
在外連結子会社の減価償却費	△4,623	△5,756
全面時価評価法による評価差額	△5,406	△5,495
固定資産圧縮積立金	△1,001	△978
その他	△4,807	△4,166
繰延税金負債合計	△96,174	△96,088
繰延税金資産(負債)の純額	7,310	2,612

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
法定実効税率	33.0%	30.8%
(調整)		
持分法による投資利益	△6.2	△5.1
交際費の損金不算入額	0.2	0.2
在外連結子会社等からの受取配当金	0.6	0.5
税額控除	△1.3	△1.2
在外連結子会社と日本の適用税率差異	△5.7	△3.8
評価性引当額の増減	3.9	1.6
未実現利益	△0.7	△0.1
連結子会社等の留保利益金の増減	0.1	△2.0
のれんの償却	2.4	0.3
その他	5.9	3.5
税効果会計適用後の法人税等の負担率	32.2	24.7

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社の報告セグメントは、当社の構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、最高意思決定機関である社長が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社は、製品の種類、製造方法、販売市場等の類似性を基礎とした事業本部制を採用しており、当社及び当社の関係会社における製品の開発、製造、販売、サービス等の事業を「自動車関連事業」「情報通信関連事業」「エレクトロニクス関連事業」「環境エネルギー関連事業」「産業素材関連事業他」の5事業部門に区分して包括的な戦略を立案し、事業活動を展開しております。したがって、当社は、「自動車関連事業」「情報通信関連事業」「エレクトロニクス関連事業」「環境エネルギー関連事業」「産業素材関連事業他」の5つを報告セグメントとしております。

各セグメントの主な事業に係る製品及びサービスは、以下のとおりであります。

- (1) 自動車関連事業……………ワイヤーハーネス、防振ゴム・自動車用ホース、自動車電装部品
- (2) 情報通信関連事業……………光ファイバ・ケーブル、通信用ケーブル・機器、光融着接続機、光データリンク・無線通信用デバイスなどの光・電子デバイス製品、アクセス系ネットワーク機器（GE-PON・セットトップボックス・CATV関連製品等）・交通制御などのネットワーク・システム製品
- (3) エレクトロニクス関連事業……………電子ワイヤー、電子線照射製品、フレキシブルプリント回路、ふっ素樹脂製品
- (4) 環境エネルギー関連事業……………導電製品、送配電用電線・ケーブル・機器、巻線、空気ばね、受変電設備・制御システムなどの電力機器、ビーム・真空応用装置、電気・電力工事及びエンジニアリング、金属多孔体
- (5) 産業素材関連事業他……………PC鋼材、精密ばね用鋼線、スチールコード、超硬工具、ダイヤ・CBN工具、レーザ用光学部品、焼結部品、半導体放熱基板

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と同一であります。

セグメント間の内部収益及び振替高は市場実勢価格に基づいております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

(単位：百万円)

	自動車 関連事業	情報通信 関連事業	エレクトロ ニクス 関連事業	環境 エネルギー 関連事業	産業素材 関連事業他	合計	調整額 (注) 1	連結 財務諸表 計上額 (注) 2
売上高								
外部顧客への売上高	1,540,817	182,685	297,330	641,515	270,742	2,933,089	—	2,933,089
セグメント間の内部売上高 又は振替高	1,168	2,003	14,691	18,028	41,412	77,302	△77,302	—
計	1,541,985	184,688	312,021	659,543	312,154	3,010,391	△77,302	2,933,089
セグメント利益又は損失(△)	88,654	11,903	10,203	13,404	19,234	143,398	78	143,476
セグメント資産	1,242,498	218,229	215,032	571,483	541,037	2,788,279	△45,431	2,742,848
その他の項目								
減価償却費 (注) 3	71,696	11,368	15,949	14,577	20,781	134,371	—	134,371
のれんの償却額	1,342	5	181	2,278	38	3,844	—	3,844
持分法適用会社への投資額	178,562	26,178	488	6,197	39,714	251,139	—	251,139
有形固定資産及び無形固定資産 の増加額	86,052	15,230	29,693	28,902	22,948	182,825	—	182,825

(注) 1. 調整額は、以下のとおりであります。

(1) セグメント利益又は損失(△)の調整額78百万円は、主に未実現利益の消去であります。

(2) セグメント資産の調整額△45,431百万円は、主にセグメント間債権消去、当社の現金及び預金、投資有価証券であります。

2. セグメント利益又は損失(△)は、連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

3. 減価償却費には、長期前払費用の償却額を含んでおります。

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	自動車 関連事業	情報通信 関連事業	エレクトロ ニクス 関連事業	環境 エネルギー 関連事業	産業素材 関連事業他	合計	調整額 (注) 1	連結 財務諸表 計上額 (注) 2
売上高								
外部顧客への売上高	1,511,739	196,173	235,981	607,494	263,096	2,814,483	—	2,814,483
セグメント間の内部売上高 又は振替高	1,482	2,067	15,132	13,924	40,847	73,452	△73,452	—
計	1,513,221	198,240	251,113	621,418	303,943	2,887,935	△73,452	2,814,483
セグメント利益又は損失（△）	98,616	21,509	△10,898	20,807	20,491	150,525	△22	150,503
セグメント資産	1,302,039	243,473	215,210	621,281	585,908	2,967,911	△64,327	2,903,584
その他の項目								
減価償却費（注）3	69,896	11,749	17,744	15,504	19,639	134,532	—	134,532
のれんの償却額	1,144	4	131	54	473	1,806	—	1,806
持分法適用会社への投資額	181,322	36,045	685	5,838	48,915	272,805	—	272,805
有形固定資産及び無形固定資産 の増加額	85,361	25,894	35,167	25,220	25,278	196,920	—	196,920

（注）1. 調整額は、以下のとおりであります。

(1) セグメント利益又は損失（△）の調整額△22百万円は、主に未実現利益の消去であります。

(2) セグメント資産の調整額△64,327百万円は、主にセグメント間債権消去、当社の現金及び預金、投資有価証券であります。

2. セグメント利益又は損失（△）は、連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

3. 減価償却費には、長期前払費用の償却額を含んでおります。

【関連情報】

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

（単位：百万円）

	ワイヤーハーネス	その他	合計
外部顧客への売上高	1,116,901	1,816,188	2,933,089

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

（単位：百万円）

日本	アジア		米州		欧州その他	合計
	中国	その他	米国	その他		
1,186,951	531,989	344,189	386,912	139,338	343,710	2,933,089

（注）売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。

(2) 有形固定資産

（単位：百万円）

日本	アジア		米州	欧州その他	合計
	中国	その他			
404,251	88,460	147,673	69,928	69,808	780,120

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載はありません。

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

（単位：百万円）

	ワイヤーハーネス	その他	合計
外部顧客への売上高	1,091,006	1,723,477	2,814,483

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

（単位：百万円）

日本	アジア		米州		欧州その他	合計
	中国	その他	米国	その他		
1,160,752	479,360	350,949	359,854	134,825	328,743	2,814,483

（注）売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。

(2) 有形固定資産

（単位：百万円）

日本	アジア		米州	欧州その他	合計
	中国	その他			
426,319	79,781	163,595	84,445	69,045	823,185

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載はありません。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

（単位：百万円）

	自動車 関連事業	情報通信 関連事業	エレクトロ ニクス 関連事業	環境 エネルギー 関連事業	産業素材 関連事業他	調整額 (注)	合計
減損損失	2,500	158	752	7,003	3,636	1,356	15,405

（注）調整額1,356百万円は、報告セグメントに帰属しない研究開発設備等に係るものであります。

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	自動車 関連事業	情報通信 関連事業	エレクトロ ニクス 関連事業	環境 エネルギー 関連事業	産業素材 関連事業他	調整額	合計
減損損失	446	190	547	262	946	—	2,391

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

（単位：百万円）

	自動車 関連事業	情報通信 関連事業	エレクトロ ニクス 関連事業	環境 エネルギー 関連事業	産業素材 関連事業他	合計
当期償却額	1,342	5	181	2,278	38	3,844
当期末残高	8,440	4	168	135	140	8,887

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	自動車 関連事業	情報通信 関連事業	エレクトロ ニクス 関連事業	環境 エネルギー 関連事業	産業素材 関連事業他	合計
当期償却額	1,144	4	131	54	473	1,806
当期末残高	6,801	—	13	81	4,062	10,957

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

1. 関連当事者との取引

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

該当事項はありません。

2. 親会社又は重要な関連会社に関する注記

重要な関連会社の要約財務情報

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

重要な関連会社である住友ゴム工業(株)（決算日 平成27年12月31日）の要約財務情報は以下のとおりであります。

流動資産合計	433,408百万円
固定資産合計	502,746
流動負債合計	284,170
固定負債合計	198,216
純資産合計	453,768
売上高	848,663
税金等調整前当期純利益	73,929
親会社株主に帰属する当期純利益	55,834

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

重要な関連会社である住友ゴム工業(株)（決算日 平成28年12月31日）の要約財務情報は以下のとおりであります。

流動資産合計	412,559百万円
非流動資産合計	485,075
流動負債合計	252,003
非流動負債合計	186,090
資本合計	459,541
売上収益	756,696
税引前利益	70,093
当期利益の帰属 親会社の所有者	41,364

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
1株当たり純資産額	1,715.28円	1,814.90円
1株当たり当期純利益金額	114.73円	137.61円
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額	—	137.24円

(注) 1株当たり当期純利益金額及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
1株当たり当期純利益金額		
親会社株主に帰属する当期純利益金額 (百万円)	91,001	107,562
普通株主に帰属しない金額 (百万円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する 当期純利益金額 (百万円)	91,001	107,562
普通株式の期中平均株式数 (千株)	793,189	781,638
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額		
親会社株主に帰属する当期純利益調整額 (百万円)	—	△293
(うち親会社の持分比率変動等によるもの (税額相当額控除後) (百万円))	(—)	(△293)
(うち社債利息 (税額相当額控除後) (百万円))	(—)	(△0)
普通株式増加数 (千株)	—	1
(うち転換社債型新株予約権付社債 (千株))	(—)	(1)
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1 株当たり当期純利益金額の算定に含めなかった 潜在株式の概要	—	—

(注) 前連結会計年度の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

⑤【連結附属明細表】

【社債明細表】

会社名	銘柄	発行年月日	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	利率 (%)	担保	償還期限
住友電気工業(株)	第26回無担保社債	29. 3. 1	—	20,000	0.30	無担保	39. 3. 1
住友電気工業(株)	第27回無担保社債	29. 3. 1	—	10,000	0.08	無担保	34. 3. 1
住友理工(株)	第4回無担保社債 (注1)	24. 3. 16	10,000 (10,000)	—	0.479	無担保	29. 3. 16
住友理工(株)	第5回無担保社債 (注1)	25. 2. 28	15,000	15,000 (15,000)	0.288	無担保	30. 2. 28
住友理工(株)	第6回無担保社債	25. 2. 28	10,000	10,000	0.936	無担保	35. 2. 28
住友理工(株)	第7回無担保社債	28. 9. 6	—	15,000	0.35	無担保	38. 9. 4
住友理工(株)	第8回無担保社債	28. 9. 6	—	5,000	0.63	無担保	43. 9. 5
住友電設(株)	第2回無担保社債 (注1)	24. 3. 30	112 (112)	—	0.83	無担保	29. 3. 31
住友電設(株)	第3回無担保社債 (注1)	24. 3. 30	170 (170)	—	1.09	無担保	29. 3. 31
住友電設(株)	第4回無担保社債 (注1)	24. 3. 30	328 (328)	—	0.83	無担保	29. 3. 31
合計		—	35,610 (10,610)	75,000 (15,000)	—	—	—

(注) 1. ()内の金額は、1年以内に償還予定の金額で、連結貸借対照表において「1年内償還予定の社債」として表示しております。

2. 連結決算日後5年内における償還予定額は以下のとおりであります。

1年以内 (百万円)	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
15,000	—	—	—	10,000

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	113,453	146,733	1.51	—
1年以内に返済予定の長期借入金	48,760	32,851	0.93	—
1年以内に返済予定のリース債務	670	518	—	—
長期借入金 (1年以内に返済予定のものを除く。)	256,239	253,862	0.46	平成30年 ～平成36年
リース債務 (1年以内に返済予定のものを除く。)	2,413	2,025	—	平成30年 ～平成50年
その他有利子負債	—	—	—	—
合計	421,535	435,989	—	—

(注) 1. 平均利率については、期末借入金残高に対する加重平均利率を記載しております。

2. リース債務の平均利率については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載しておりません。

3. 長期借入金及びリース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)の連結決算日後5年内における返済予定額は以下のとおりであります。

区分	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	47,230	56,104	45,928	34,900
リース債務	151	186	158	155

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、連結財務諸表規則第92条の2の規定により記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(百万円)	650,261	1,312,107	2,034,071	2,814,483
税金等調整前四半期(当期) 純利益金額(百万円)	24,746	54,435	117,113	167,792
親会社株主に帰属する四半期 (当期)純利益金額(百万円)	21,525	38,856	73,314	107,562
1株当たり四半期(当期) 純利益金額(円)	27.36	49.60	93.73	137.61

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額 (円)	27.36	22.22	44.18	43.91

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	13,746	16,501
受取手形	※1 16,535	※1 16,657
売掛金	※1 236,266	※1 250,126
たな卸資産	※2 23,005	※2 23,461
繰延税金資産	12,462	13,985
短期貸付金	※1 179,847	※1 159,620
その他	※1 87,151	※1 81,447
貸倒引当金	△9,021	△2,820
流動資産合計	559,991	558,977
固定資産		
有形固定資産		
建物	47,281	47,713
構築物	6,309	6,307
機械及び装置	18,401	22,341
土地	16,811	16,808
建設仮勘定	7,476	6,706
その他	6,180	6,826
有形固定資産合計	102,458	106,701
無形固定資産		
ソフトウェア	6,067	5,852
その他	162	137
無形固定資産合計	6,229	5,989
投資その他の資産		
投資有価証券	75,825	75,801
関係会社株式	394,311	408,299
長期貸付金	※1 28,824	※1 32,578
その他	※1 52,942	※1 53,320
貸倒引当金	△55	△55
投資損失引当金	△112	△4,112
投資その他の資産合計	551,735	565,831
固定資産合計	660,422	678,521
資産合計	1,220,413	1,237,498

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形	667	698
買掛金	※1 141,504	※1 151,939
短期借入金	※1 135,954	※1 121,195
未払金	※1 17,472	※1 16,113
未払費用	※1 22,915	※1 19,924
その他	※1 12,098	※1 9,242
流動負債合計	330,610	319,111
固定負債		
社債	—	30,000
長期借入金	167,259	162,221
繰延税金負債	9,328	13,452
債務保証損失引当金	3,836	3,527
その他	1,876	2,082
固定負債合計	182,299	211,282
負債合計	512,909	530,393
純資産の部		
株主資本		
資本金	99,737	99,737
資本剰余金		
資本準備金	177,660	177,660
その他資本剰余金	23	23
資本剰余金合計	177,683	177,683
利益剰余金		
利益準備金	18,329	18,329
その他利益剰余金		
別途積立金	345,440	345,440
繰越利益剰余金	38,643	53,839
利益剰余金合計	402,412	417,608
自己株式	△570	△20,572
株主資本合計	679,262	674,456
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	28,221	32,821
繰延ヘッジ損益	21	△172
評価・換算差額等合計	28,242	32,649
純資産合計	707,504	707,105
負債純資産合計	1,220,413	1,237,498

②【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
売上高	※1 928,976	※1 901,892
売上原価	※1 855,874	※1 833,665
売上総利益	73,102	68,227
販売費及び一般管理費	※1, 2 74,516	※1, 2 69,151
営業損失(△)	△1,414	△924
営業外収益		
受取利息及び受取配当金	※1 45,224	※1 52,488
その他	※1 5,790	※1 3,525
営業外収益合計	51,014	56,013
営業外費用		
支払利息	※1 1,727	※1 1,455
その他	※1 3,481	※1 4,267
営業外費用合計	5,208	5,722
経常利益	44,392	49,367
特別利益		
投資有価証券売却益	※3 3,166	※3 6,496
特別利益合計	3,166	6,496
特別損失		
固定資産除却損	725	767
投資有価証券評価損	※4 15,531	※4 3,930
事業構造改善費用	※5 1,881	※5 2,762
和解金	5,354	2,229
特別損失合計	23,491	9,688
税引前当期純利益	24,067	46,175
法人税、住民税及び事業税	△4,830	△2,297
法人税等調整額	6,507	5,735
法人税等合計	1,677	3,438
当期純利益	22,390	42,737

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本							
	資本金	資本剰余金			利益準備金	利益剰余金		利益剰余金 合計
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金 合計		その他利益剰余金		
					別途積立金	繰越利益 剰余金		
当期首残高	99,737	177,660	23	177,683	18,329	275,440	114,020	407,789
当期変動額								
剰余金の配当							△27,767	△27,767
当期純利益							22,390	22,390
自己株式の取得								
自己株式の処分			0	0				
別途積立金の積立						70,000	△70,000	—
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）								
当期変動額合計	—	—	0	0	—	70,000	△75,377	△5,377
当期末残高	99,737	177,660	23	177,683	18,329	345,440	38,643	402,412

	株主資本		評価・換算差額等			純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	評価・換算差額等 合計	
当期首残高	△564	684,645	38,227	33	38,260	722,905
当期変動額						
剰余金の配当		△27,767				△27,767
当期純利益		22,390				22,390
自己株式の取得	△6	△6				△6
自己株式の処分	0	0				0
別途積立金の積立		—				—
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）			△10,006	△12	△10,018	△10,018
当期変動額合計	△6	△5,383	△10,006	△12	△10,018	△15,401
当期末残高	△570	679,262	28,221	21	28,242	707,504

当事業年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本							利益剰余金 合計
	資本金	資本剰余金			利益準備金	その他利益剰余金		
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金 合計		別途積立金	繰越利益 剰余金	
当期首残高	99,737	177,660	23	177,683	18,329	345,440	38,643	402,412
当期変動額								
剰余金の配当							△27,541	△27,541
当期純利益							42,737	42,737
自己株式の取得								
自己株式の処分			0	0				
別途積立金の積立								—
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）								
当期変動額合計	—	—	0	0	—	—	15,196	15,196
当期末残高	99,737	177,660	23	177,683	18,329	345,440	53,839	417,608

	株主資本		評価・換算差額等			純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	評価・換算差額等 合計	
当期首残高	△570	679,262	28,221	21	28,242	707,504
当期変動額						
剰余金の配当		△27,541				△27,541
当期純利益		42,737				42,737
自己株式の取得	△20,002	△20,002				△20,002
自己株式の処分	0	0				0
別途積立金の積立		—				—
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）			4,600	△193	4,407	4,407
当期変動額合計	△20,002	△4,806	4,600	△193	4,407	△399
当期末残高	△20,572	674,456	32,821	△172	32,649	707,105

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価基準及び評価方法

①子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法を採用しております。

②その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）を採用しております。

時価のないもの

移動平均法による原価法を採用しております。

(2) デリバティブの評価基準及び評価方法

時価法を採用しております。

(3) たな卸資産の評価基準及び評価方法

主として総平均法による原価法（貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）を採用しております。

2. 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産

定額法を採用しております。

3. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒による損失に備えるため、一般債権については、貸倒実績率により算定した額を、貸倒懸念債権については、担保処分等による回収見込額を控除した残額のうち債務者の財政状況等を考慮して算定した額を、破産更生債権等については、担保処分等による回収見込額を控除した残額をそれぞれ貸倒見積額として計上しております。

(2) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。

①退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

②数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（15年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生翌事業年度から費用処理することとしております。

(3) 投資損失引当金

子会社等に対する投資に係る損失に備えるため、当該会社の財政状態等を勘案して必要額を計上しております。

(4) 債務保証損失引当金

子会社等の借入等に対して差入れを行っている保証債務等の履行によって生ずる損失に備えるため、当該会社等の財政状態等を勘案して個別に算定した損失見込額を計上しております。

4. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異の未処理額の会計処理の方法は、連結財務諸表における会計処理の方法と異なっております。

(2) 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

(3) 連結納税制度の適用

連結納税制度を適用しております。

(貸借対照表関係)

※1 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務（区分表示したものを除く）

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
短期金銭債権	377,058百万円	364,949百万円
短期金銭債務	214,710	218,435
長期金銭債権	28,678	32,461

※2 たな卸資産の内訳

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
製品	1,861百万円	1,510百万円
仕掛品	15,726	17,414
原材料及び貯蔵品	5,418	4,537

3 保証債務

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
保証	16,247百万円 (14,144百万円)	15,313百万円 (14,477百万円)
保証予約	10,472 (9,936)	21,694 (21,270)
経営指導念書	139,896 (139,682)	163,940 (163,878)
計	166,615 (163,762)	200,947 (199,625)

上記のうち、()内書は自己負担額を示しております。

4 その他

前事業年度（平成28年3月31日）

自動車関連事業において、同分野の競争法違反行為により損害を被ったとして、米国等において集団訴訟が当社及び当社子会社に対して提起されているほか、一部の自動車メーカーと損害賠償に関する交渉を行っております。

当事業年度（平成29年3月31日）

自動車関連事業分野の競争法違反行為について、一部の自動車メーカーと損害賠償に関する交渉を行っております。

(損益計算書関係)

※1 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
営業取引による取引高		
売上高	425,966百万円	419,465百万円
仕入高	534,936	536,579
営業取引以外の取引高	114,271	132,376

※2 販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度13%、当事業年度15%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度87%、当事業年度85%であります。

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
給料手当及び福利費	16,011百万円	17,218百万円
研究開発費	29,202	30,873
控除額	△13,448	△20,341

控除額に含まれる主なものは、関係会社からの経営指導料（前事業年度△9,430百万円、当事業年度△11,017百万円）であります。

※3 投資有価証券売却益

前事業年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）
関係会社株式売却益107百万円が含まれております。

当事業年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）
関係会社株式売却益322百万円が含まれております。

※4 投資有価証券評価損

前事業年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）
関係会社株式評価損15,469百万円が含まれております。

当事業年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）
関係会社株式評価損3,915百万円が含まれております。

※5 事業構造改善費用

前事業年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

新製品開発力の強化のため研究開発テーマの一部見直しを行ったことなどに伴うものであり、主な内容は減損損失1,473百万円であります。

当事業年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

PC鋼材事業等の効率化を目的とした一部事業拠点の再編に伴うものであり、主な内容は減損損失1,136百万円及び固定資産除却損1,253百万円であります。

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式
前事業年度（平成28年3月31日）

区分	貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
子会社株式	41,637	146,578	104,941
関連会社株式	25,075	152,182	127,107
合計	66,712	298,760	232,048

当事業年度（平成29年3月31日）

区分	貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
子会社株式	41,596	155,652	114,056
関連会社株式	25,075	168,802	143,727
合計	66,671	324,454	257,783

(注) 時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式の貸借対照表計上額

(単位：百万円)

区分	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
子会社株式	311,908	326,252
関連会社株式	15,691	15,376

これらについては、市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積ることなどができず、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「子会社株式及び関連会社株式」には含めておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
繰延税金資産		
投資有価証券	17,349百万円	17,304百万円
繰越欠損金	13,552	12,165
固定資産	5,533	5,235
外国税額控除	2,046	2,558
たな卸資産	2,310	2,244
未払賞与	1,891	2,005
投資損失引当金	34	1,258
その他	8,168	6,108
繰延税金資産小計	50,883	48,877
評価性引当額	△24,150	△28,814
繰延税金資産合計	26,733	20,063
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△16,843	△13,751
退職給付引当金	△6,632	△5,695
その他	△124	△84
繰延税金負債合計	△23,599	△19,530
繰延税金資産の純額	3,134	533

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
法定実効税率	33.0%	30.8%
(調整)		
交際費の損金不算入額	0.5	0.3
受取配当金の益金不算入額	△54.4	△31.7
評価性引当額の増減	18.4	9.3
税率変更による期末繰延税金資産の減額修正	6.2	0.5
外国法人税	4.5	2.0
その他	△1.2	△3.8
税効果会計適用後の法人税等の負担率	7.0	7.4

④【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却累計額
有形固定資産	建物	47,281	4,309	695 (566)	3,182	47,713	90,108
	構築物	6,309	583	111 (64)	474	6,307	17,807
	機械及び装置	18,401	10,147	606 (414)	5,601	22,341	89,846
	土地	16,811	23	26 (-)	-	16,808	-
	建設仮勘定	7,476	20,478	21,248 (49)	-	6,706	-
	その他	6,180	3,192	204 (66)	2,342	6,826	24,549
	計	102,458	38,732	22,890 (1,159)	11,599	106,701	222,310
無形固定資産	ソフトウェア	6,067	3,897	2,056 (47)	2,056	5,852	7,368
	その他	162	11	- (-)	36	137	227
	計	6,229	3,908	2,056 (47)	2,092	5,989	7,595

(注) 1. 「当期減少額」欄の()内は内書きで、減損損失の計上額であります。

2. 当期増減額の主要なものは次のとおりであります。

建設仮勘定の増加額：研究開発設備

4,718百万円

【引当金明細表】

(単位：百万円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	9,076	172	6,373	2,875
投資損失引当金	112	4,000	-	4,112
債務保証損失引当金	3,836	1,271	1,580	3,527

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から翌年3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	期末配当 3月31日 中間配当 9月30日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の 買取り及び買増し（注）	
取扱場所	（特別口座） 大阪市中央区北浜四丁目5番33号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	（特別口座） 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
取次所	—
買取及び買増手数料	無料
公告掲載方法	電子公告により行います。但し、事故その他のやむを得ない事由により 電子公告による公告をすることができないときは、日本経済新聞に 掲載して行います。 公告掲載URL http://www.sei.co.jp/
株主に対する特典	なし

（注）単元未満株式の買取り・買増しを含む株式の取扱いは、原則として、証券会社等の口座管理機関を経由して行うこととなっておりますが、特別口座に記録されている株式については、特別口座の口座管理機関である三井住友信託銀行株式会社が直接取り扱っております。

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

[事業年度(第146期)自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日]
平成28年6月24日 関東財務局長に提出

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

[事業年度(第146期)自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日]
平成28年6月24日 関東財務局長に提出

(3) 四半期報告書及び確認書

[(第147期第1四半期) 自 平成28年4月1日 至 平成28年6月30日]
平成28年8月4日 関東財務局長に提出

[(第147期第2四半期) 自 平成28年7月1日 至 平成28年9月30日]
平成28年11月4日 関東財務局長に提出

[(第147期第3四半期) 自 平成28年10月1日 至 平成28年12月31日]
平成29年2月3日 関東財務局長に提出

(4) 臨時報告書

平成28年6月28日 関東財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2(議決権行使結果)の規定に基づく臨時報告書であります。

平成29年1月17日 関東財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の規定に基づく臨時報告書であります。

(5) 訂正発行登録書(普通社債)

平成28年6月28日 関東財務局長に提出

平成29年2月2日 関東財務局長に提出

(6) 自己株券買付状況報告書

報告期間(自 平成28年5月1日 至 平成28年5月31日) 平成28年6月9日 関東財務局長に提出

報告期間(自 平成28年6月1日 至 平成28年6月30日) 平成28年7月14日 関東財務局長に提出

報告期間(自 平成28年7月1日 至 平成28年7月31日) 平成28年8月4日 関東財務局長に提出

報告期間(自 平成28年8月1日 至 平成28年8月31日) 平成28年9月8日 関東財務局長に提出

報告期間(自 平成28年9月1日 至 平成28年9月30日) 平成28年10月11日 関東財務局長に提出

(7) 発行登録追補書類(普通社債)及びその添付書類

平成29年2月23日 関東財務局長に提出

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

平成29年6月28日

住友電気工業株式会社

取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	谷 尋史	印
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	前田俊之	印
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	山田徹雄	印

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている住友電気工業株式会社の平成28年4月1日から平成29年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、住友電気工業株式会社及び連結子会社の平成29年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、住友電気工業株式会社の平成29年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、住友電気工業株式会社が平成29年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- (注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が別途保管しております。
2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

平成29年 6 月28日

住友電気工業株式会社
取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	谷 尋史	印
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	前田俊之	印
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	山田徹雄	印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている住友電気工業株式会社の平成28年4月1日から平成29年3月31日までの第147期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、住友電気工業株式会社の平成29年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

- (注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が別途保管しております。
2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。

【表紙】

【提出書類】	内部統制報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の4第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成29年6月28日
【会社名】	住友電気工業株式会社
【英訳名】	Sumitomo Electric Industries, Ltd.
【代表者の役職氏名】	社長 井上 治
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	大阪府中央区北浜四丁目5番33号（住友ビル）
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号） 株式会社名古屋証券取引所 （名古屋市中区栄三丁目8番20号） 証券会員制法人福岡証券取引所 （福岡市中央区天神二丁目14番2号）

1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

社長井上治は、当社の財務報告に係る内部統制を整備及び運用する責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の設定について（意見書）」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用しています。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することで、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものであります。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性があります。

2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当事業年度の末日である平成29年3月31日を基準日として行われており、評価に当たっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠しました。

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制（全社的な内部統制）の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定しています。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況の評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行いました。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、当社並びに連結子会社及び持分法適用会社について、当社の財務報告の信頼性に及ぼす金額的及び質的影響の重要性の観点から必要な範囲を決定し、僅少なものを除いた全ての連結子会社及び持分法適用会社を対象として行いました全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定しました。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、原則、各事業拠点の前連結会計年度の売上高（連結会社間取引消去後）の金額が高い事業拠点から合算していき、前連結会計年度の連結売上高の概ね2/3に達している事業拠点を「重要な事業拠点」としました。選定した重要な事業拠点においては、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として売上高、売掛金及びたな卸資産に至る業務プロセスを評価の対象としました。さらに、選定した重要な事業拠点にかかわらず、それ以外の事業拠点も含めた範囲について、重要な虚偽記載の発生可能性が高く、見積りや予測を伴う重要な勘定科目に係る業務プロセスやリスクが大きい取引を行っている事業又は業務に係る業務プロセスを、財務報告への影響を勘案して重要性の大きい業務プロセスとして評価対象に追加しています。

3 【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、当事業年度末日時点において、当社の財務報告に係る内部統制は有効であると判断いたしました。

4 【付記事項】

付記すべき事項はありません。

5 【特記事項】

特記すべき事項はありません。